



---

# 耀歌

---

王女と草原の覇者



## 将軍府の朗君

唐の時代は中原の民、山、砂漠と草原の民が牽制し合いながら、一応表面上の友好を保っていたが一触即発の状況であった。

この日は草原の国阿史那氏から、唐の皇太子に蹴鞠試合の申し出があり、長安で開催されることとなっていた。お互い腹の探り合いといえる。

阿史那氏は、覇者可汗のもと、小可汗がそれぞれ虎軍、狼軍、鷹軍を率いる。蹴鞠試合には最強と言われる鷹軍で挑む。そこには唐軍の戦力を計る狙いがある。

長安は第四皇子、第五皇子、将軍府を中心とした選抜軍で迎え撃つ。

弓矢で落とされた鞠を、面を着けた各10名が奪い合い、敵陣の的に当てると鈴が鳴る。得点の合図だ。両腕を除く脚、胴、頭で鞠を操り、人を土台にして高く飛び上がりの的を狙う空中戦が見どころだ。

まさに交互に点の取り合い。前半戦の最終局面で第四皇子と鷹軍の軍師が、鞠を奪い合いぶつかり着地体制が崩れた。第四皇子が軍師の下敷きに。阿史那軍の得点となり、唐は劣勢だ。第四皇子と阿史那の軍師は手当を受けることに。後半戦が始まるその時、唐軍と阿史那軍に一人ずつ交代兵が入る。阿史那軍、唐軍がそれぞれに拝礼して迎えた二人は、唐軍は将軍家の朗君、阿史那軍は鷹軍の総帥だ。

「唐軍は劣勢だ。阿史那軍は大柄な体躯と速攻を活かす攻撃的な鶴翼の陣を張る。こちらは脚技と鞠捌きで、攻守変幻自在な雁行の陣で対抗する。」

「はい。朗君の仰せの通りに。」

「まず鞠を奪う。阿史那軍は高さがある。こちらは土台2名、高さのある阿史那軍の身体を利用しさらに飛び上がる。鞠は左に落とす。さすがに高いので土台の2名で落下するわたしを支えて欲しい。3名で鞠を捌きながら敵陣を走り抜き、最前線で2名が土台に。わたしは右から一気に駆け上がり、第五皇子が高く上げた鞠に向かって跳躍的に当てる。他は鞠と第五皇子を追いかける阿史那軍を防御する。まずは1点を返すぞ。」

先頭に構える朗君は背後に合図を送る。唐軍は陣形を整える。

「雁行の陣か、面白い。こちらはひたすら攻めるのみ。」

「予想通り鶴翼の陣で攻撃一方か。」

太鼓の合図で弓矢が放たれ、鞠が落とされる。2名の土台を駆けあがり、総帥の肩を蹴り上げ鞠を奪う朗君。頭で前方左の敵陣に落とす。総帥は肩を蹴り上げ、高さを出して鞠を奪う唐軍の策に慌てた。まさか自分を土

台にするとは……。

「奪え、左と最前線に集中しろ。」

総帥は自陣を中央から駆け上がるが、唐軍の激しい防御に合う。そこに右から俊足で駆け上がる唐軍兵が……。先ほどの若者だ。

自陣の最前線に唐軍2名の土台が組まれ、若者が一気に飛び上がった。鞠が鈴を鳴らす。

一斉に歓声が上がった。

敵の攻撃を瞬時に交わし攻め上がる。堅い防御で敵の脚を止める。戦況に合わせた攻防は将の采配がすべて、見事だ。

「唐軍に防御されたら潰せ。囲まれたら力で突破し、体勢を崩して鞠を奪え。唐軍はこっちより華奢で脆い。」

「はい。」

唐軍が素早く鞠を捌く。頭で鞠を味方に繋ぐその時に、高さのある阿史那軍が鞠を奪い、総帥が手薄な唐軍の陣地を走り抜け一気に的を狙う。鈴の音が響く。

「総帥は強い体躯に俊足、そして司令塔だ。わたしが合図をしたら総帥を二人掛りで止める。その隙に駆け上がるわたしの前に土台を。必ず仕留めて逆転だ。」

「時がありません。」

「攻守で自分の役割を果たせば勝てる。」

駆け上がる総帥を2名が抑える。左右の阿史那軍を囲む。唐軍は力で崩される。俊足の朗君は一気に中央を駆けあがる。瞬時に土台が組まれ駆け上がる。第五皇子からの鞠に頭では間に合わない。朗君は地面に背を向けた状態で、空中に舞い上がる鞠を頭上より高い位置で蹴る。鈴の音が高らかに鳴り響いた途端に、試合終了の花火が上がった。間に合った。

唐軍、阿史那軍、観客は宙に浮いた華麗な足技に呆然とする。地上では唐軍が落ちてくる朗君を受け止める。勝利の喜びでそのまま胴上げだ。朗君が何度も高く舞い上がった。会場は拍手の渦だ。

たった一人の戦術に負けた。敵の強みを認め、己の弱点を見極め最良の戦術を立てる。その冷静さと最大限の力を引き出す知力は敵ながら称賛に値する。一体何者だ。

阿史那軍で最強と恐れられる鷹軍の総帥らしい。冷静沈着で敵の動きを瞬時に掴んで策を講じる。戦であれば到底敵わない。唐軍は阿史那軍に攻め込まれたら負けるだろう。

阿史那軍の逗留する館は東宮に近く、賓客用で美しい庭園に面している。草原の民であり騎馬族でもある彼らにとって馬は大切な友だ。館の近くで馬を休ませる。

馬の世話人に交じって駿馬の産地と名高い西域の馬に、餌を世話する若者がいる。

気性が荒く他人を寄せ付けない総帥の馬、冬雪が身体を拭いてもらい、若者から餌をもらう。

「冬雪が……。おまえは誰だ。」

「あまりにも美しい馬なので。冬雪というのですね。あなたの馬ですか。」

「そうだ。」

そこへ護衛兵が駆け寄る。

「東宮は皇太子の居城だ。馬は遠慮願いたい。即刻厩に移してほしい。」

「阿史那氏は人馬同様の扱いが決まりだ。」

双方にらみ合いとなった。

馬の影から声が・・・

「賓客である阿史那氏に倣うのが礼儀ではないか。東宮や將軍府はそのような些事をいちいち客人に押し付けるほど狭量なのか。」

「お前は誰だ。生意気な。前へ出ろ。」

朗君は兵の前に出る。

「これは・・・朗君様。」

兵は一斉に跪く。

「朗君、わたしが愚かでした。どうか命だけはお助けください。」

「阿史那氏の馬はこのままで。きちんと世話をするように申し付けたぞ。」

「はい。」

「早く失せろ。」

退散する軍が一斉に拝礼する。

「白総將軍、失礼します。」

「行け。鷹軍總帥にご挨拶します。わたしは白総將軍です。朗君はここにいらしたのですね。」

「白総か。美しい阿史那氏の馬に見惚れていたのだ。」

「こちらは阿史那氏の逗留する館です。どうかお屋敷にお戻りください。」

「ここにいてはならぬのか。」

「いえ、それはいいのですが・・・。」

「こちらに逗留する客人は、蹴鞠で闘ったのだから友だ。もう少し馬を見ていたい。先に戻れ。」

「はい。待機します。」

「失礼しました。無礼をお許しください。わたしは將軍府の者で六耀です。」

「わたしは阿鷹。冬雪が懐くとは。」

「何かの偶然でしょう。仔馬から育てるほど馬が好きだからか、馬に嫌われることはありません。それでは失礼します。」

朗君の呼称は貴族、皇族の縁戚か。東宮に自由に出入りできる將軍府の者。知力、胆力、戦術に長け、品性が備わった美しい容姿。西域の馬を見分ける審眼は馬術もかなりの腕だろう。一体何者なのか。

六耀と名乗る將軍府の者とは耀歌、皇太子妃の姪で皇女を母に持つ王女である。いまの皇太子妃は兵権を掌握する將軍府に長女として生まれ、皇帝の第一子に嫁いだ。そして皇太子の妹である耀歌の母は、三軍を率いる楚大將軍、齊北王の父に嫁いだのだ。皇宮の縁戚としては特席の位だ。

皇子の中でも、第四、第五皇子と耀歌は従兄同士で武術、馬術、兵法すべて他者を寄せ付けない強者だ。耀歌は常に男装でいまや誰もが朗君と呼び、女子と知らぬ者も多い。

阿鷹は阿史那氏可汗の甥で、最強の兵と恐れられる鷹軍の若き総帥だ。狼軍の総帥は可汗の息子、虎軍の総帥は可汗の義弟でそれぞれ競い合っているが、圧倒的に鷹軍の力が勝る。

蹴鞠試合を終え、鷹軍は長安に隊商の姿で留まる。敵状視察だ。ここはものに溢れ交易が盛んで豊かな生活が営まれている。草原では自然との融合が求められるが、長安では人がものやことを動かしている。

2 か月経つ頃、草原での生活で研ぎ澄まされる五感が危険を察知する。ここ長安で不穏な動きがあるようだ。早々に長安を脱出する。

問者の報せで、皇帝、皇太子に反旗を翻す勢力が台頭してきているらしい。

ふと六耀が気になる。確か將軍府は皇帝、皇太子との縁戚。皇太子の弟である秦王一派に追い込まれれば命はない。

耀歌は従兄の第四皇子と第五皇子、將軍府の精鋭と草原との国境付近で宿営し、狩猟を楽しむ。

唐きつての精鋭部隊が、狩猟で長安を留守にしている間、皇太子の弟秦王と配下の將軍が、皇宮、東宮、將軍府を襲撃。皇帝一族は囚われ、皇太子はもちろん、血縁者から側近すべて惨殺された。惨劇で混乱する中、將軍府から数騎の駿馬が駆け抜ける。宿営に報せるためだ。將軍府から脱出した兵は次々と宿営に向かった。

明け方、宿営に報せが入る。

「殿下、朗君、皇宮と東宮、將軍府が秦王とその配下によって襲撃、謀反です。」

「え・・・叔父上がなぜ。」

「周到に計画されていたようで、將軍府の精鋭が宿営で長安を留守にする期を狙ったようです。」

「それで。」

「皇宮の酒宴のあと寝込みを襲われ、ほぼ壊滅、生存者はいないかと。」

「母上や兄上は、戻らなければ。」

「いえ危険です。早々に宿営から国境の泉州、朔州へ分かれて入りましょう。こちら將軍府の兵が先行しています。まだ追手は届きません。」

「わたしは泉州に、従兄上は將軍府の兵と共に朔州へ向かってください。どうかご無事で、生きて会いましょう。」

「耀歌、無茶をするな。必ず生きて会おう。」

耀歌は侍女の香姜と西華とともに泉州に向かった。追手は必ず泉州を目指す。2人の皇子は文武両道で人望も厚く兵法に長けた逸材だ。再興する力を蓄え、無念を晴らして欲しい。わたしは所詮女子。困になるくらいしか価値はない。

「泉州に追手が来る。できるだけ皇子から追手を離す。狙いはわたしだ、2人は逃げるのだ。ここで別れよう。」

「わたしたちは將軍府の武人です。耀歌様と最後までご一緒します。」

3騎は西へ走っていった。

## 耀歌と阿鷹

野営をしながら泉州に入る。宿営地より銀子は持ち出したので当分困ることはない。装飾品も高価なのでいざとなれば売ればよい。

泉州は長安の騒動など知る由もなく人と物が溢れていた。ただし阿史那氏との国境が近いので、守りは固く緊張感を肌で感じる。

街はずれの館を借り、しばらく逗留することにする。国境を守るのは周將軍だ。どう転ぶかわからず、すぐに頼るのは憚られた。

緊張する毎日からここ数カ月は解放され、畑を耕し作物を育て、裏山で狩りをする民の暮らしを満喫していた。

ある日裏山の岩陰に手負いの鷹を見つけた。

羽を痛め飛ぶことができない。かなり衰弱して抵抗もできない大鷹を連れて帰る。

宿営から持ち出した薬を擦り込み、細かく刻んだ肉をくちばしに運ぶ。耀歌は寝ずに看病をする。

「耀歌様、足環を装着しているうえ、かなり大きな鷹です。草原の民に飼われていたのでは。誰かに矢で射られたのでしょうか。回復すればきっと飼い主の元に帰ります。」

大鷹は鷹軍の総帥の名「阿鷹」と呼ぶことに。ふと阿鷹の姿が脳裏に浮かんだ。

「総帥、鷹の鳳凰が戻ってきません。途中で狼軍の矢に討たれたかもしれません。」

「伝令は抜き取られたな。」

「はい。白紙です。火で炙り、水に濡らしているうちに溶けるでしょう。」

「耀歌様、阿鷹がだいぶ高く飛べるようになりました。まだ遠くに行くことはできませんが、この周辺を旋回しています。」

「それは何より。そのうちに帰還できるでしょう。」

阿鷹は耀歌に懐き纏わりついている。傷が癒えるまで寝食共に過ごした恩があるのだろう。ある日飛び立った阿鷹は山頂をしばらく旋回して、さすがに力尽きて耀歌の元へ戻ってきた。そろそろお別れだ。

「総帥、鷹笛を鳴らしたら向こうの山頂に鷹が旋回しているのが見えます。鳳凰では。しばらく旋回すると急降下しました。」

「泉州の街はずれの竹林か。行ってみよう。」

総帥阿鷹と軍師阿楊は馬で泉州に向かう。

長安では秦王が皇帝となり、第四皇子、第五皇子、耀歌の搜索が始まった。不安定な情勢が続く中、長安から程遠い国境朔州や泉州に軍を派遣できず、周辺の搜索に留まっていた。すでに死亡したとの噂も流れている。

皇子が向かった朔州は、広大で長安の意向が届かず、独立性の強い城主公孫氏が治める。公孫氏は皇太子の弟、

皇族だ。皇帝と反りが合わず僻地に追い込まれたが、民を重んじ、国を繁栄させる君主に忠誠を誓う精鋭兵が集まり、阿史那氏も一目置く存在だ。

朔州の公孫叔父上なら従兄の皇子を受け入れてくれるだろう。

笛が聞こえる。独特の音色で聴覚の鋭い耀歌でもわずかに聞こえる程度だ。これは鷹笛か……。阿鷹が上空を旋回する。竹林の向こうから蹄の音が近づいてきた。香姜と西華が剣を構える。

「あやしい者ではない。飼っている鷹が笛に応えたので探している。」

「確かに大きな鷹を保護しています。羽を痛めていましたが、だいぶ回復して飛べるように。こちらへ。」

鳳凰が阿鷹の頭上を旋回する。

「あなた様の鷹でしたか。よかった。」

そうやって顔を上げた耀歌に阿鷹は驚く。

「將軍府の朗君、六耀殿ではないか。」

「鷹軍の総帥、阿鷹殿か。」

「なぜ泉州に……。それも城内ではなく街はずれに。」

「長安を留守にした隙に急襲されました。東宮や將軍府は壊滅し家族は惨殺されました。」

2人の皇子と狩場の宿営地で別れ、わたしたちは泉州に。混乱しているので追手はまだのようです。阿鷹殿は国境付近に逗留ですか。」

「泉州の城下に入らないのか。」

「はい。泉州の主、周將軍を知らないのです。」

「それは正しい。將軍は阿史那氏と取引するつもりだ。長安のご機嫌を伺うより、国境で阿史那氏と交易を結び、安全な政を望んでいる。いま頼れば六耀殿は取引の駒に使われるだろう。」

「朔州はどうですか。」

「朔州の君主は自国の利益を一番に考える。皇子を長安に引き渡すとは思えない。安心していいだろう。そしてこれからも自国を繁栄させて国境沿いに領地を広げていくはずだ。それに阿史那氏と良好な関係を築き始めている。やがては交易によって民や物が行き交うだろう。草原との国境沿いはいずれ皇子たちが治めることに。そして長安には抑えきれない強大な力を手にすることになる。」

「無理な戦いをしなければ、人が死ぬことも、街が崩壊することもない。治政は民を一番に考えなければならない。殺戮で権力を手中に治めた皇帝は民から敬われず、繁栄するのか疑問が残る。」

「わたしたちには瞬時に唐の情報が入る。六耀殿に危険が迫るようならすぐに報せよう。」

「ありがとうございます。一応將軍府の武人、自らの命は守れます。」

「それでは。鷹の御礼はいずれまた。」

「はい。」

「阿楊、竹林の近くに護衛を。ここも安全とは言えない。」

「はい。」

数日置きに、軒先に大量の食材や薪、防寒の毛皮が置かれている。阿鷹の指示だろう。耀歌はお返しに、香姜と西華に手巾や枕を縫って、刺繍を刺すように指示をする。

「総帥、刺繍が美しい手巾や枕がお返しとは。さすが唐の朗君、品性が高い。」

「そうだな。阿史那氏とは違った趣だ。」

阿鷹は手巾を懐にしまう。枕には品のよい香が炊かれている。まるで女子の心配りだ。

「総帥、泉州の城下から、朗君の館に刺客が向かうとの情報が入りました。」

「すぐに弓隊を潜伏させ、護衛しろ。刺客は残らず始末するのだ。」

夜更けに人の気配に目を覚ます。刺客か。耀歌、香姜、西華は剣を携え警戒態勢に入る。すると叫び声が……。扉を開けると矢が的確に刺客を射抜く。しばらくすると鷹軍の軍師阿楊が姿を現す。

「周軍の刺客だ。間者からの報せで駆け付けた。間に合ってよかった。ここは危険なのでこのまま軍営に案内する。」

「助かりました。これ以上ご迷惑はかけられません。」

「すぐに発たないと囲まれるぞ。」

「香姜、銀子と必要なものを持って。西華は將軍府の者とわかる痕跡を残さないように。阿楊殿、感謝します。」

「礼は総帥に・・・。」

そこへ黒装束の刺客が追ってきた。

「狙いはわたしだ。鷹軍は先に。」

10騎の鷹軍と香姜、西華、耀歌に矢が放たれる。草原まで一気に駆け抜け、鷹軍の軍営に入る。刺客はすべて鷹軍によって討ち取られた。

馬上から耀歌が落ちる。

「朗君、どうしました。」

香姜が馬から飛び下り駆け寄り。耀歌の肩に矢が刺さっていたのだ。

「毒矢かもしれない。すぐに手当てを。」

阿鷹が幕舎から飛び出した。

「すぐに軍医を。わたしの幕舎に。」

軍医が慌てて総帥の幕舎に駆け込む。

「総帥、治療しますので人払いを。」

「総帥、毒矢ではありませんが、傷は深くしばらくは高熱が出るでしょう。薬湯を用意します。日に2回薬草を擦り込むように。」

「わかった。」

「総帥はお気づきですか。この若者は女子です。傷を診るために衣服をほどいて気付きました。」

「女子だと。絶対に他言するな。いいな。洩れたら斬る。」

「はい。心得ています。」

「待機しろ。」

「香姜、西華入れ。」

「朗君は無事ですか。」

「傷は深く熱が下がるまでは安心できないそうだ。六耀殿は女子だったんだな。」

「はい。皇后を叔母に、皇女を母に持つご身分です。父上は唐の楚大將軍、齊北王です。

朗君は耀歌王女です。どうかわたしたちが女子であることは内密に願います。」

「隠してきたことだ。いまさら女子ということもない。軍医は決して漏らさないから安心しろ。」

六耀は確かに美しい。しなやかな肢体で上背もある、常人にはない容姿に女子と聞いて納得だ。

阿鷹は胸が高鳴った。しばらく六耀として接するつもりだ。

## 鷹軍の策士

広大な草原の生活は傷を癒すのに最適だ。

他国に最強と恐れられる阿史那氏鷹軍は、民との距離が近く総帥は慕われている。たまに可汗から送り込まれる奴隷も、女子は炊事、洗濯、裁縫をこなし、男子は武器を作り、家畜や馬の世話、力仕事に従事し、不当に扱われることはない。そして全員が武芸を身に着けた兵士だ。身分と氏素性がすべての長安とはまるで違う、人間らしい暮らしがそこにある。

「総帥、乾季に備え、牧草を備蓄します。水も溜める必要があります。」

「水と食糧不足は悩むな。」

「阿鷹殿、山から川に流れる水を草原に行き渡らせながら氾濫を防ぐ策がある・・・。」

「本当か。」

「はい。東宮、皇宮、將軍府、秦王府は、わたしの策で水源を確保し、きれいな水が隅々まで行き渡り、薬草を栽培しています。草原でも可能です。人工を集めてもらえますか。」

「どうするのだ。」

「上流からの水を下流で操り草原一帯に水を行き渡らせ、牧草を枯らすことのないようにします。川が氾濫しないように貯池を造り、水不足にも対処します。お任せください。香姜、西華、準備に入るぞ。」

「はい。」

集められた人工は、六耀の描く図面の通りに木を伐採し組み立てる。そして溜池を掘る。

ゲルを3か所に張り、山の麓の柔らかい土を運び込む。

風雨や寒さをしのぐ牛舎、羊舎、鶏舎、厩を図面通りに建てる。

1カ月後。

「総帥、大変です。水が言うことを聞くんです。六耀様の指示通り組み立てた水車は、水流を自在に操れるのです。」

阿鷹は馬を駆って川へ。阿楊も続く。視界の先に大きな水車が水飛沫をあげながら、草原に水を行き渡らせる。草原の中央に向かって小さな川や池ができ軍営の中心まで水を運び、溜めることができる。川まで水を汲む重労働から救われる仕組みだ。川から清水と共に魚が流れ込み、小動物が水を求め集まる。枯地に緑が芽吹いている。

「阿鷹殿。これで水不足や濁流に悩むことはない。食糧不足にならず、水汲みという重労働から解放される。」

「素晴らしい。あのゲルは何を・・・。」

「麓の土を運び入れ、人馬の薬草栽培。隣は年中収穫できるような作物を栽培する。そして食糧貯蔵庫。」

「あの小屋群は・・・。」

「冬季に備えた厩、牛舎、羊舎、鶏舎だ。家畜が安全で健康であれば多くの子牛や羊が生まれるし、鶏卵も不足することはない。牧草も備蓄できる。そして南東の広大な土地を耕し作物を育てる。いま馬糞を使って飼料を作り、土と混ぜ合わせ土壌を作っている。」

「なんと。阿史那氏が自給自足なんて夢だ。」

「安心、安全な飲水も確保した。軍営に水場を作る。四方に砂利、砂、小石、布を重ねて、川からの水を通し濾過する。清水がより安全な飲水となる。沸かせば保存できて、戦にも携帯できる。病気が蔓延することもなく安心だ。」

「この短期間にここまで進化するなんて。六耀殿、感謝しきれない。」

阿鷹、阿楊は六耀に跪き拳を胸に当て敬意を払う。

「立ってください。命の恩人に報いたまで。あとは武器や蹄鉄を造る鍛冶場が出来上がります。戦は地の利や天象に合わせて武器が必要になるでしょう。戦術に加え独自の武器で優勢に立つのです。」

「総帥、六耀様はまるで天子です。水流を意のままに操り、草原と民を豊かにする。神に感謝します。」

六耀は短期間で草原の民を魅了した。

鷹軍から尊敬される朗君を見て、香姜と西華は感慨深い。

将軍府の朗君は長安でも、ここでも人心を掌握する唯一無二の存在。手放した秦王は、のちに悔やむことになるだろう。

「総帥、六耀殿は一体何者なんだ。ここをまるで一国のように変えていく。そして誰もが敬う存在だ。」

「ああ、知性、感性、品性、容姿に恵まれ度胸もある。武術や馬術にも秀でていて唯一無二の存在だ。友になれて最高だ。」

「いずれ可汗が知ることになるのか。」

「あまり目立たないようにしろ。」

いまは国境が安定している。できるなら戦は避けて力を蓄えたい。いずれは泉州を攻めることになるだろう。可汗は残虐で戦を好む。狼軍、虎軍両総帥も、乾季や冬季は他国からの略奪によって食糧難を回避する。これでは永遠に戦から逃れることはない。国を豊かにすれば戦も必要ないのだ。ここは阿鷹の想像を超える繁栄ぶりだ。

六耀は藍色の衣を好む。軍営では藍の天子と女子を夢中にさせているらしい。

阿鷹の幕舎に六耀が入る。

「阿鷹殿、いまいいかな。」

「いま阿楊から 乾季に向けて備蓄が順調だと聞いたところだ。」

「自給自足が可能ないま、鷹軍の逸品を生みだしたらどうだろうか。他国と交易することで潜入も可能だ。」

「逸品って・・・。」

「梅の苗木が育ち、そろそろ梅の実が収穫できる。梅酒を造ろうと思う。」

「造れるのか。」

「将軍府の梅林で作る梅酒は皇宮に献上するほどの美酒で、西華ならではの味だ。肥料と水車のおかげで梅の成長が速く豊作だ。」

「必要な人工は言ってくれ。」

「窯を造ったので、窯業を教えて酒瓶、酒樽を造る。」

「窯業も・・・。」

「ここは上質の土が採れるから。そこで総帥と軍師に相談がある。」

「聞こう。」

「いずれ鷹軍は泉州を攻めるだろう。ただ攻め落とせば街は崩壊し、民は疲弊し再興に要する時は相当だ。そこで今から泉州に潜入し、壊さず民力を活かしたまま泉州をものにできる策を練るのだ。」

「どうやって。考えはあるのか。」

「潜入は情報収集がすべて。泉州の役人や兵から本音を得ることが必要だ。そこで鷹軍が泉州に潜入し妓楼を営むのだ。」

「妓楼?? どうやって。」

「鷹軍の羊鍋は絶品だ。長安だったら大繁盛間違いない。泉州でも同じだろう。そして西華仕込みの梅酒。まずは羊鍋の店を開く。そして頃合いを見て妓楼へ広げる。」

「妓女や楽師はどうするのだ。」

「ご謙遜を・・・阿史那氏の子は美しい。踊りも楽器も上級だ。中原の舞踊はわたしが、身のこなしや礼節は香姜が仕込む。素養があるので短期間でものにするだろう。妓楼での会話は最高の情報だ。わたしが楼主として入り込むつもりだ。」

「六耀殿をはじめ皆知られた顔なのでは。」

「お任せを。」

確かに泉州に妓楼を開けば最高の潜入だ。

荒らすことなく、泉州の繁栄そのものが手に入る。しかし短期間で羊鍋、梅酒、妓楼とは大胆過ぎる。耀歌王女、果たしてできるのか。

## 「耀郭楼」の楼主

連日六耀は舞踊と楽器の稽古をつける。妓女と楽師は選抜された者たちだ。  
西華は梅酒造り、香姜は酒瓶や鍋の製造を教え、阿楊と鷹軍数名共に泉州へ準備に入る。

「阿楊殿、ここは街の中心で羊鍋を開店するには適します。やがて隣の妓楼を買い取りましょう。まずは準備に入ります。」

そこには美しい女子が立っていた。

「香姜殿か。なんと美しい姿、本当は女子ではないのか。泉州で知った者に遭遇しても、將軍府の香姜殿とはわからない。さすがだ。」

「気に入っていただけで何よりです。」

うまく店舗が手に入り、さっそく羊鍋の準備だ。軍営から選りすぐりの料理人3名と給仕の女子3名を呼び寄せる。数か月後妓楼を買い取る予定だ。

「随分と瀟洒な酒瓶だ。」

「西華の梅酒をご賞味ください。」

阿楊はグイッと梅酒をあおる。すっきりとした喉越しながら、口いっぱい梅の甘い香りが広がり、やがて鼻腔を抜ける。洗練された都の梅酒は酒器との相性も抜群だ。

「美味しい。さすが長安仕込みだ。いくらでも飲めるな。羊鍋の力強さにすっきりとした味わいの梅酒は最高だ。」

「ありがとうございます。いよいよ開店です。しばらくわたしはここに滞在し、料理人と夫婦ということに。」

「いや兄妹で十分だ。夫婦には若すぎる。」

「承知しました。」

香姜殿の女子姿には参った。本当に女子だったらいいのに。毎日一緒にいられる奴らが恨めしいぞ。

軍営では、六耀が舞踊を教え、楽譜に倣って楽器を教える。

鷹軍の兵士は天幕を覗き込み、六耀の美しい姿に見惚れている。

「天子様は男子か、それとも女子か。俗人になく美しさには男女の区別はないのか。」

「六耀様、本当に美しい。見惚れて稽古になりません。あ、総帥……。」

「阿鷹殿、いらしたんですね。」

「天幕の外は見物人で溢れている。皆が騒ぐ踊りをぜひ見たい。」

「明日の晩、宴を開いてください。そこで皆の踊りを披露します。さすが草原の民。思ったより習得が早い。」

「すぐ宴の準備をさせよう。泉州の羊鍋は明後日に開店だ。」

軍営の中心に舞台が設営された。妓楼で働く妓女の踊りと音楽が披露される。衣装も鷹軍とは異なる柔らかい生地で、幾重にも重なり広がる美しい衣だ。遊牧民に伝わる愉快で力強い踊りとは異なり、繊細で妖艶な動きが観客を魅了する。

妓楼を営むことは鷹軍にとって有益に事が運ぶと、阿鷹は確信する。

繁盛する光景が目浮かぶ。

踊り子が下がり深紅の布が舞う。耀歌だ。

美しい琴の音色に合わせ、しなやかに舞う姿はまるで天女だ。香姜と西華が影のように耀歌の左右で踊る。肢体を反らし、高く脚をあげ、妖艶な視線を投げる。誰もが魅了される美しさだ。そして舞台袖に消える。

声も出ないほどの沈黙から、割れんばかりの歓声と拍手。

阿鷹はもう耀歌の魅力から抜ける出口はないと確信した。そして一生耀歌を守ると誓った。

阿楊は香姜が女子だと確信した。男子にあのしなやかな舞は不可能だ。將軍府でも男装し、朗君の護衛として女子ではいられなかったのだろう。もうここでは男子でいる必要はない。

泉州の城下では、草原の羊鍋が大繁盛だ。肉は柔らかく、香辛料が独特でいくら食べても飽きない。そして梅酒が絶品だ。まさか阿史那氏鷹軍が営んでいるとはだれも思わない。

美しい女将のおかげで連日満席。阿楊は気が気でない。

「阿鷹、なんで香姜殿が女将なんだ。」

「美しい女将として大評判らしいな。」

「香姜殿は女子だ。言い寄る奴は斬る。」

「知っていたのか。」

「踊りを見ればわかるだろう。男子にあのしなやかさは不可能だ。」

「六耀殿も西華殿も女子だろう。阿鷹は六耀殿が好きなんだろう。いつ気づいた。」

「泉州を追われ弓矢でけがをしたときに軍医に聞かされた。事情があるんだろうと気づかないふりをしている。」

いよいよ耀郭楼が開店。瞬く間に妓女の美しさで繁盛。美味しい羊鍋、希少な梅酒も逸品と評判だ。泉州と交易する商人が上客となり、各地から耀郭楼を目指してやってくる。

「妓女の踊りも素晴らしいが、なんといっても楼主の美しさはこの世の者とは思えない。まるで天女様だ。」

「たまにしか顔を見せないのが惜しい。周將軍もまだ会えないらしい。」

「副女将も最上級の美しさだ。」

「楼主が美しいと噂で持ち切りだ。」

「香姜と西華がいれば十分妓楼が華やぐ。それに鷹軍の面々は芸事に秀でているし、羊鍋に梅酒は絶品だ。さすが草原の民は素晴らしい。阿鷹殿に感謝する。」

「女装はしないのか。」

「たまにでいい。」

耀郭楼にはあらゆる情報が集まる。周將軍は長安の顔色を窺うことなく他国との交易を推進。阿史那氏との良好関係を望む。狼軍の総帥と懇意ともいわれているが、狼軍は泉州を奪う腹積もりだ。鷹軍は泉州を狼軍に渡したくないが、悪賢い周將軍は勘弁願いたいのも本音だ。

「六耀殿。これから泉州をどうすればいいか、聞きたい。」

「泉州で妓楼の他、あらゆる店を買い取り、商人を味方につける。交易で賑わう街は民によって繁栄する。君主が代わろうと関係ない。鷹軍の商いとして地盤を固め、財を蓄えて狼軍が攻める前に君主と協定を結べばいい。」

「狼軍が黙っていないのでは・・・。」

「いま、狼軍と鷹軍では相当兵力の差がある。それは阿史那氏全てが認めているはずだ。それでも納得しないなら明け渡せばいい。狼軍に泉州は治められないのだから。己の狭量を思い知るのにいい機会だ。」

「誰にも侵略させない力を持つてばいいのだ。」

「軍力だけでは限界がある。民力を活用し富めることで無駄な戦もなくなる。やがて周將軍は朔州に呑み込まれるだろう。それまで君主にしてやればいいのか。狼軍と結託するなら殺してしまえばいい。妓楼の地下倉庫を広げ、あらゆる物資や武器を備えるのも忘れるな。軍營では情報が洩れるかもしれない。」

耀歌王女は軍師だ。あらゆる策を練る。泉州を利用しさらに力を蓄える。鷹軍が阿史那氏で最強であれば敵もいない。残虐な可汗や総帥たちを排除し、草原に平安と豊かさをもたらしたい。耀歌のように文武に優れ、共に覇業を成し遂げる女子を娶ると決めている。やがては鷹軍を離れて耀歌とのんびり暮らしたいと願う。

## 泉州の攻略

「総帥、六耀殿の采配で妓楼は大繁盛。周囲一帯の店もすべて鷹軍が営むことになるとは。泉州で相当の財と名声を築いた。一体六耀殿は何者なんですか。」

「朗君との呼称通り、將軍府で育った貴公子だ。」

「商才に長けている貴公子とは。確かにあの内面から湧き出る品性は生まれつきだ。」

「総帥、狼軍が朔州を攻めます。」

「狼軍や虎軍でも朔州の公孫氏には敵わないだろう。それに六耀の従兄である唐の皇子もいる。六耀同様にかんりの強者だ。」

「朔州を仕損じたら、腹いせに泉州を攻めると騒ぐのでは。」

「朔州に潜入させろ。」

「総帥、朔州の偵察には西華も連れて行って欲しい。」

「六耀殿、西華をか。目的は。」

「わたしが見る限り、朔州を墜とすことは虎でも狼でも可汗であっても不可能だ。それに朔州を攻めても益がまるでない。それでも気が済まないなら惨敗でいいだろう。西華には従兄に伝言を頼みたいのだ。將軍府の兵なので面会も可能だろう。」

「何を伝える。」

「周將軍をこちらで仕留めるので、泉州を治めて欲しいと。」

「え・・・周將軍を暗殺するのか。」

「そうだ。公孫叔父上は長安の意向など無視、秦王も国境の州などかまっていられない。いままで將軍に任せていた泉州を、皇族である公孫叔父上が治めても長安が攻め込むことはない。それだけ国境周辺を治める公孫氏は脅威なのだ。秦王も長安を脅かさず国境周辺から出ない公孫氏を刺激したくない。いまの泉州の状況を報告せ、虎と狼の暴挙に巻き込まれずに城下を支配している鷹と水面下で組むことを六耀の名で伝える。」

「上策だ。公孫氏は相当長安に警戒されているのだな。」

「触らぬ神に祟りなし・・・まさにそれだ。返事次第ですぐに周將軍を仕留める。」

「わかった。」

「絶対に他には知られないように。」

西華は、鷹軍の潜入兵と共に朔州に入った。

將軍府の玉牌を差し出し

「朗君の遣いだ。公孫殿下に取り次いでもらいたい。」

城内に通されると、公孫氏、第四、第五皇子が西華を迎える。

「殿下に拝謁いたします。將軍府耀歌王女の遣いで参りました。」

「楽にせよ。」

公孫氏は耀歌からの文を読み、皇子に渡した。

「耀歌は無事のようだな。」

「はい。泉州で商いをしています。命を狙われ阿史那氏の鷹軍総帥に助けられました。狼軍、虎軍が朔州を攻めると聞き参りました。」

「虎も狼もこの際可汗も叩き潰す。もう、うんざりだ。鷹軍の総帥は相当の切れ者らしい。それに朔州、泉州を攻めるつもりはないようだ。鷹軍の他は大したことはない。戦力の差は歴然なのにそれぞれが認めていない。いずれ鷹軍の総帥が阿史那氏のハーンになるだろう。さすが耀歌だな。」

「早々に泉州に向かいます。目立たぬように2手に分かれて入ります。周将軍が倒れ、朔州が治めるとなれば、無益な戦にならないと思われれます。」

「叔父上、阿史那氏との交戦に可汗を引きずり出しましょう。残虐で戦を好む奴は始末しなければ。」

「可汗を参戦させる策を練る必要がある。」

「叔父上、わたしは長安から命を狙われ鷹軍の総帥に助けられました。泉州の城下で鷹軍と共に商いをはじめ、ほぼ街を手中に収めました。鷹軍は可汗をはじめ狼軍、虎軍から疎まれています。文武に秀でる総帥の元、最強の精鋭軍を率いて、軍営も自給自足、食糧危機も皆無となり一国の体を成しています。阿鷹殿は阿史那氏のハーンとして最適でしょう。朔州は鷹軍との戦は避けるべきです。どうか従兄をよろしく願います。戦のない平安な世になりますように。 耀歌 筆」

「耀歌が息災で何より。鷹軍の総帥には改めて御礼を申し上げるつもりだ。皇子両人は才知に溢れ文武両道。広大な国境の各州をまとめ上げ文官、軍人から敬われている。阿史那氏とは国境を隔てて睨み合うよりも、交易を結び双方豊かな治政を行うべきだ。泉州には第五皇子を向かわせる。大軍は目立つので邪魔者はそちらで始末して欲しい。どうか身体に気を付けて無茶だけはしないように。秦王から必ず守るので安心するように。誰よりも優秀な耀歌に会いたい。 公孫 筆」

「総帥、耀歌を助けていただき感謝する。きっと貴殿のお役に立てる逸材と信じている。泉州の件、承知した。精鋭兵によって周将軍とその側近を始末して欲しい。すぐに第五皇子が泉州に入る。十分双方益になるように話し合っ欲しい。朔州に潜入した兵とつなぎをつけたいのでそちらからの連絡を待つ。いつかゆっくり酒を酌み交わそう。公孫 筆」

鷹軍の潜入兵はさっそく朔州で羊鍋の店を準備する。西華は文を預かり、早々に朔州の城から鷹軍に帰還する。

「ただいま戻りました。殿下から耀歌様と総帥宛に文を預かりました。」

「すぐに総帥に文を届けて。」

「はい。」

「公孫殿は礼を尽くす武人だ。まずは周将軍の暗殺だ。第五皇子が泉州に向かう。ぜひ会ってみたい。」

「六耀です。阿鷹殿、いまいいですか。」

「中へ。」

「周の暗殺は妓楼を利用します。周將軍とその側近、軍を招きます。そこで周と側近2名を暗殺。残りは問題なく五兄に従うでしょう。周將軍は楼主のわたしと懇意になりたいとか。香姜と西華で迎えます。女子だけなら警戒しないでしょう。」

「將軍府の武人なら、油断する周將軍とその側近を仕留めるのもわけないだろう。」

「残りの兵は、眠り薬から目覚めたら送り出せばいい。」

「3人の遺体は刺客の仕業に見せかけて、路地裏に置けばいいだろう。まさか妓女によるものとは思いません。」

「それで決まりだ。わたしたちは奥に控え、妓楼の周辺に鷹軍を配置する。」

「はい。では明日の夜に。」

「また女装を拝めるのだな。」

「からかわないでください。」

耀郭楼は周將軍とその配下で貸し切りだ。妓女総出で迎える。貴賓席には周將軍と2名の側近が座る。そこへ華やかな衣に身を包んだ香姜と西華。少しおいて深紅の衣を纏う耀歌が・・・。

客や妓女全員が耀歌に見惚れる。

「楼主の耀李です。こちらは香児と華児です。お待ちしております。まずは一献。」

「本当に常人にはない美しさだ。隣へ、酒を注ごう。」

店の奥から阿鷹が睨みつける。美しく輝く耀歌の手を握り、膝を撫でる周にいらつく。わたしが殺したい。

隣の阿楊も香姜の肩を抱く男が憎い。わたしだって触れたことがないのに。あの男をすぐに斬りたい。

総帥と軍師が店の奥から嫉妬している姿は鷹軍には見せられない。それぞれが想う美女に放たれる秋波が身体に刺さるようだ。

そろそろ酒に混ぜた眠り薬が効き始め、うとうとした頃合いで首に当てた刀を引く。鷹軍が3人の遺体を路地裏に置く。刺客の仕業に見せかけるのだ。妓楼は何もなかったように目覚めた兵を送り出す。朝に遺体が発見されるだろう。

翌朝、妓楼に兵が押し掛ける。

「周將軍と側近が殺された。何か知らないか。怪しい者は見なかったか。」

「いえ、皆さま夜半にそれぞれ帰路につきました。わたしたちが見送ったので間違いありません。こちらは何も変わったことはございませんが。」

「これだけ人目があるなか妓楼で殺されることはあり得ない。やはり帰路での暗殺か。」

妓楼の帰りに刺客に暗殺されたことで決着した。

周將軍が殺されたことで泉州が揺らぎ始めた頃、朔州から第五皇子の軍が到着。その堂々たる振る舞いに、君主の貫録を見た兵は安堵する。即、改革を打ち出す新しい主を快く受け入れた。

数日後の夜、第五皇子は数人の護衛と耀郭楼に向く。鷹軍の総帥も数名を連れて妓楼に入る。耀歌、香姜、西華が迎える。

「六耀、無事だったか。」

「はい。五兄も相変わらずですね。こちらが阿史那氏鷹軍の総帥阿鷹殿です。」

「六耀の従兄、玉齊です。六耀の命を助けていただき感謝します。」

「阿鷹です。朗君の策によって鷹軍は豊かに変わりました。戦のない、民が豊かになる交易を望みます。」

「わたしたちは秦王の謀反によって親、兄弟すべてを亡くし、長安の將軍府を追われました。唐の無法地帯といわれる国境で、叔父の公孫に匿われています。阿史那氏の阿鷹殿とともに国境を越えて物や人が行き交う治世を望みます。」

「現在の可汗では難しいかと。朔州攻めを画策しています。」

「こちらも策を講じるつもりです。その時はお話しします。」

「このまま泉州に赴任ですか。」

「はい。これから泉州をさらに豊かに、交易盛んな国にします。草原一の勇士阿鷹殿がいれば心強い。」

「朗君に受けた恩は必ず返します。」

「しばらくは六耀をお願いします。いずれ泉州に迎えます。」

## 耀歌と阿鷹と玉齊

「総帥、玉齊皇子の護衛から聞いた話では、泉州に入った皇子は將軍府の姫が許嫁だとか。風変わりな姫で、文武に優れた男装の麗人、朗君と称されていたようです。果たして存命なのか、消息不明だそうです。」

「そうなのか。」

朗君とは耀歌のことだ。あの2人は婚約していたのか。再会したら泉州で共に暮らすのか。耀歌を離したくない。

耀歌は年を経て益々輝いてきた。長安ではまだ幼かったが、いまは目を見張る美しさだ。朔州と泉州が落ち着いたら、婚礼の仕切り直した。耀歌も快諾するだろう。

玉齊は戦や飢饉による流浪の民を泉州に受け入れ、無償で家と田畑を与え、作物が育ち生活が安定するまで税を免除した。隊商が行き交い、草原の民が作る織物、陶器、梅酒は希少な逸品と評判になり泉州でよく売れた。

妓楼は各地の豪商が上客となり繁盛し、長安をはじめ各国の情報が集まる。

泉州と鷹軍は十分な貯えと備えで、国境沿いに領地を広げていった。

耀歌は相変わらず鷹軍の軍営で暮らす。長安育ちの耀歌は、地平線が広がる草原に魅せられていた。駿馬を駆り、鷹と会話する。四季の移り変わり、愉快的な草原の民、そして阿鷹がいる。まだ女子であることは告げていない。男子だから阿鷹の傍にいられる。女子とわかったら、離れていくかもしれない。

「阿鷹、このままだと玉齊皇子に耀歌殿を奪われるぞ。許嫁だとか。城の改築に合わせ、妃の館を造るために、朔州から大工を呼び寄せたらしい。耀歌殿が好きなら気持ちを伝えるべきだ。」

「阿楊、気持ちを伝えるって、どうしたらいいかわからない。」

「玉齊殿は眉目秀麗、人望もあり明君と評判だ。鷹軍の総帥にも劣らない。」

「まだ男子として接している。」

「後悔することのないように。速攻の鷹軍が後れを取るわけにはいかないぞ。忠告だ。」

「六耀殿、西域の駿馬を贈ろう。」

「本当か。」

漆黒に輝く美しい馬だ。阿鷹の愛馬冬雪より穏やかな面相だ。

「冬雪に比べたら穏やかな気性でまだ若い。これから馴らすといい。」

「夏陽と名付けよう。冬雪と相性がいいように。」

「夏陽と冬雪か。いい響きだ。絶景の夕日を眺めに早速馬駆けだ。」

丘陵地まで馬を駆る。耀歌の騎乗は見事だ。

「ここから眺める夕陽は素晴らしい。」

「長安にいたら見られなかった。」

「草原は好きか。」

「わたしにはここでの暮らしが性に合っているようだ。鷹軍が好きだ。これも阿鷹殿のおかげ、ありがとう。」

「六耀殿、今の気持ちを言っても・・・」

「はい。」

「ずっと草原にいて欲しい。ここでわたしの傍にいてくれるか。」

「追い出されるまでいてもいいなら。」

阿鷹はそれ以上何も言えなかった。六耀が耀歌とわかっていることも。言えば離れていってしまいそうで怖かった。

女子とわかれば敬遠されるかも。想い人の傍にいられるならこのまま六耀でいいかもしれない。

「軍医、熱にうなされている。診てくれ。」

「阿楊軍師、数名の兵が高熱で倒れた。」

ここ3日で軍営50名程が高熱で伏している。体中が燃えるように熱く、次々と伝染している。

「総帥、わたしたちは医術の心得がある。以前長安で流行した熱病の類かと思う。すぐに薬草を煎じて薬湯を作る。熱に侵された者は隔離して欲しい。症状のない者は離れて。」

六耀、香姜、西華は布で顔の半分を覆い、薬草園から数種の薬草を運び出し煎じる。そして一人一人の脈を採り、優しく声をかけて額に冷えた布を充てる。

「心配はない。この薬湯を飲み干して横になって。まずはゆっくり休むこと。必ず治るから怖がらないで。」  
ゲルは温められ、薬草が次々運ばれ薬湯が作られる。

「軍医殿、今晚が山場です。何とか峠を越えればいいのですが、ほかに病人は出ていませんか。」

「はい。いまのところは。」

病人専用のゲル3棟を六耀、香姜、西華、軍医2名が巡回する。夜通し屋外で薬湯を作る。阿鷹と阿楊が様子を見にゲルへ。そこには寝ずに薬草を煎じる六耀たちが・・・。

「分け隔てなく病人を寝ずに診るなんて、まるで天女だな。」

「ああ。六耀のいない草原なんて考えられない。もう離れられない。」

「早く気持ちを伝えるようにな。あれだけの女子は他にいない。誰にも奪われるなよ。」

3日目の朝、ほぼ全員の熱が下がり、お粥を食すまでに回復をした。

「まるで天女か天子か、命を助けていただき感謝します。」

草原の民が口々に礼を述べる。

そこへ阿鷹が六耀を迎えに来た。

「総帥、六耀様のおかげで皆熱が下がりました。心より感謝します。」

「六耀殿、皆順調に回復しているようだ。幕舎まで送る。」

「阿鷹殿・・・。」

六耀は気を失った。

「総帥、六耀様はこの二晩、食事も摂らず一睡もしていません。あとはわたしたちがいますので幕舎までお願いします。」

阿鷹は六耀を抱きかかえ、馬に乗せ幕舎へと向かった。

「ここは……。皆の具合は。」

「目覚めたか。ここはわたしの幕舎だ。2日間眠り続けていたがどうだ。」

「ずっと傍に……。もう大丈夫だ。熱病はどうなった。」

「ほぼ完治した。安心しろ。眠らず食さず相当衰弱していたぞ。軍医も香姜、西華も休んでいる。」

「阿鷹殿、ありがとう。」

「鷹軍を救ってくれて、こちらこそ感謝しきれない。」

阿鷹殿の姿を見てほっとしたのか、気を失ったようだ。わたしをずっと見てくれた。いつもわたしを助けてくれる。阿鷹殿とずっと共にいたい。

女子と気づいていることを六耀殿に話すべきか。回復したら想いを伝えるべきか。泉州の皇子の元へ去っていくのか。

## 離間の計 朔州

朔州からの情報では、街は阿史那氏の噂で持ち切りという。

「阿史那氏の可汗は全盛期の威光は失せ、小可汗に頼るばかりとか。もう朔州を攻める力もないと聞くぞ。」

「戦は鷹軍頼みだそう。朔州が鷹軍に攻められたらかなり苦戦するな。どうせなら可汗の軍で願いたい。」

「誰がそんな噂を。」

「狼軍や虎軍の兵には周知の事実だ。もう可汗に先陣は無理だとか。」

こういった噂は、朔州の街から可汗の本陣にあつという間に知れ渡る。もちろん噂の元は公孫氏だ。客で溢れる羊鍋の店では、可汗の重病説や隠棲の話題で持ち切りだ。

当然、可汗の耳に入る。

「何を、どいつが噂しているのだ。わたしは阿史那氏最強を誇る覇者可汗だ。即刻先陣を切って朔州を攻めるぞ。準備に入れ。援軍として狼軍が後方に控えよ。」

可汗が先陣で朔州を攻めると鷹軍に報せが入る。

「総帥、可汗の軍が朔州攻めの準備に入ります。後方に狼軍が援軍として入ります。」

「公孫殿の術にはまったな。まさに離間の計だ。小可汗を信頼できず、己の威光を知らしめたいという愚かな考えが敗北を招く。さすが人心を捉える公孫殿の策だ。」

「いまの可汗では朔州は墜とせない。」

「阿鷹殿、これから朔州に向かう。離間の計で可汗に先陣を切らせ、後方から攻める。」

「六耀殿か。狼軍が援軍だ。手強いぞ。」

「わたしに策がある。まず朔州に入って地の利を確かめたい。」

「十分に気を付けて欲しい。可汗と狼はともかく攻める戦術だ。」

「鷹軍さえいなければ勝機はある。」

「お手並み拝見だな。」

「即断即決即攻でなければ、鷹軍が進軍することになる。それは避けたい。」

「六耀殿と敵に分かれることは絶対はない。」

「そのために朔州に入る。」

後方の援軍を退け、可汗を討ち取れば鷹軍が阿史那氏の覇者となる。国境との戦はこれで終わりを迎え、草原に平安が来る。もし可汗が生き延びたとしても敗者として葬られる。兵力、戦術を鑑みても朔州の勝利は固い。その上、稀代の軍師が朔州入りする。

「総帥、鷹軍はいつ動く。」

「後方の援軍が狼だ。さらに後方で援軍のふりして高みの見物だ。鷹軍は阿楊の号令があるまで待機する。」

「可汗は全兵率いる。噂に激怒して、可汗の先陣を躊躇する軍師を斬り捨てたらしい。」

「可汗が討たれば陣形は乱れる。すぐに兵を引かせろ。そうすれば兵が無駄死にすることはない。六耀の戦術が見えない。それによって鷹軍の動きを決める。」

## 地の利と天象と人智

六耀は香姜、西華を率いて朔州に入った。

「公孫叔父上、わたしに將軍府の白総將軍をつけてください。可汗を必ず仕留めます。」

「軍師六耀の戦術を見たい。白総、六耀の指揮下に入れ。」

「はい。」

「白総將軍、まずは草原を流れる犀川上流に20名の兵と視察に行く。戦場の周辺を知りたい。香姜、西華も行くぞ。」

六耀は犀川の上流に向かう。急斜面で落差が激しく、大雨が降ると上流から中流が激流となり、深く幅が広い下流は氾濫しやすい。そのおかげで侵攻の防御線になっているのだ。

下流の氾濫を防ぐために、木材と岩で防波堤を組み上げているので、いまは水深も浅く人馬が超えるのに問題はない。

「川底を狼軍が渡り始めたら、上流と中流に設置された堰を断って一気に水を下流に流し込む。ここ数日の雨で相当量の水が勢いを増し、川底にいる狼軍の人馬は流される。」

「可汗は。」

「川の手前で四兄の軍が待ち受けて先陣と挟み撃ち。狙うは可汗の首。側面に伏兵を配置して可汗の兵と狼軍の主力を討ち取る。」

「では、上流、中流域の貯水状況と堤防を確認し、いまから兵を配置します。」

「そのときがくるまでは人馬の往来可能に。くれぐれも慎重にすること。」

「はい。」

さすが將軍府の朗君。地の利を生かす戦術に長け、人心を掌握する術を得ている。楚大將軍が、将の才は六耀様が最上級だといったのも納得だ。

いよいよ出陣。犀川を超えた可汗の軍3万と、真正面から迎え撃つ六耀2万、左翼に香姜1万、右翼に白総將軍1万。川の向こうには狼軍2万、左後方に虎軍2万が待機。可汗の兵を挟み撃ちにする伏兵は、第四皇子1万の兵だ。

狼軍からかなり後方に控えるのが鷹軍1万だ。いよいよ兵馬が配置される。

「藍色の鎧の六耀殿は魚鱗の陣のようだ。しかも先陣は六耀殿だ。」

太鼓の合図で一斉に攻撃だ。六耀軍に向かって可汗の先陣が突進する。射程距離に入る兵を、六耀軍の矢が視界を遮るように一斉に放たれる。次々可汗の兵が馬から落とされる。倒れる兵馬をかき分け、六耀と西華を先頭に槍で次々敵を刺殺、可汗に向かっていく。火球が投げ込まれ、馬が暴れ、可汗軍は陣形が崩れる。そこを六耀軍は敵を討ちながら駆け抜ける。

「可汗、両翼から攻められ、このままでは全滅します。ひとまず川向うにいる狼軍に合流しましょう。」

「狼軍に川を渡る合図をしろ。」

花火があがる

「可汗からの合図です。」

「川を渡り加勢するぞ。」

狼軍が一斉に川底を渡る。

「川岸に上がる前に、堰を斬れ。」

白総軍が太鼓で合図を送ると、上流、中流から堰き止められていた大量の雨水が激流になって超速で下流に流れ込む。川底を渡っていた狼軍の兵馬は半数以上激流に呑まれた。

そこへ第四皇子率いる軍が川を背に、兵を引く可汗軍を迎え討つ。

上空に舞う鷹が確実に可汗を捉える。

「阿史那氏の可汗もここまでだ。」

「可汗を守れ。」

西華と、香姜が可汗の周囲を蹴散らし刺し殺す。

六耀が馬上を飛びながら可汗の胸を刺す。

背後から第四皇子の剣が可汗の首を突き抜けた。剣を引いて首が胴体から離れた。

第四皇子の伏兵によって、逃げる兵は壊滅。狼軍も激流に流され、虎軍、鷹軍は兵を引いた。可汗の息子である狼軍の総帥は第四皇子に討ち取られ、朔州軍から歓声上がる。首級は朔州に持ち帰る。

六耀は可汗の一撃で深手を負い、馬上から崩れ落ちた。

「六耀様が大けがを・・・。」

「わたしが運ぶ。」

第四皇子が抱き上げ馬に乗せた。

「阿鷹、六耀殿が可汗の一撃で深手を負ったらしい。」

「どうなんだ。けがの様子は。」

「城内に入ったまではわかるが。いま報せを待っている。」

夏陽の馬上を跳ね上がり、可汗を槍で仕留めたときに、宙に飛ぶ六耀を可汗の剣が刺したのをこの目で見た。攻める六耀は美しかった。陣形も見事で、兵の動きに乱れない統率力。可汗軍を囲い込み、挟み撃ち。激流で援軍を壊滅、さらに虎軍、鷹軍に川を渡らせない策。速攻で短時間に勝敗が決まる兵法も見事。天象、地の利、人智を活かす稀代の軍神だ。

「阿鷹、六耀って何者なんだ。こんな戦術みたこともない。朔州と争うのは無謀だな。」

「六耀は戦神だ。虎軍に行くぞ。」

決戦の前に六耀は第四皇子に申し出た。

「四兄、信頼のおける將軍2名をここへ。」

「郭玄、陵治だ。」

公孫氏、第四皇子、白総、香姜、西華、郭玄、陵治を前に、六耀は戦術を語りだした。

「第一に公孫叔父上は城内に。叔父上に何かあれば朔州だけではなく国境全域が危険です。今回の戦はどうか六耀にお任せください。」

先陣は可汗の陣の正面から攻め込みます。郭玄將軍は騎馬の弓術に秀でている兵を2千騎お願いします。攻め上がる可汗の軍を横列で一斉に弓で襲撃します。それから火球を投げ入れて、軍列を崩したところで2万の兵

で交戦します。先陣は脇目を振らずに可汗の首を狙いますので、西華は兵を率いて可汗の護衛を斬り崩す。陵治將軍は香姜を補佐に、火球で崩れた敵を左翼から1万の兵で。白総將軍は右翼から1万の兵を率いてください。可汗を討ち取ります。第四皇子は川を背に撤退する可汗の軍を必ず壊滅してください。

犀川の上流と中流に堰を断ち切る伏兵を100名ずつ置いてください。可汗が川向うの軍に加勢の合図をしたら、白総將軍は川に流れ込む兵を見ながら、太鼓を鳴らしてください。上流、中流の堰を断ち水流を放ちます。川向うから加勢する軍は可汗の息子が率いる狼軍でしょう。激流で相当数の人馬を失います。少数が岸に這い上がった皇子の軍で一騎残らず討ち取ってください。狼軍の総帥は絶対に生かしておかないように。禍根を残しますから。」

「可汗は軍に守られ見失うのでは。」

「いえ、わたしには強い伏兵がいます。」

「ところで朗君、先陣は誰が務めるのですか。かなり危険な役目ですのでわたしをご指名ください。」

「陵治將軍はこれからの守りに欠かせない逸材です。それにここにいる皆様は、治政を担う役割があります。先陣はわたし六耀、西華で。わたしは長安の將軍府より追われながら国境に辿り着いた身です。命あるだけ奇跡なのですから、ここは皆様とともに悔いなく戦うつもりです。」

「必ず先陣軍と共に左翼、右翼軍で朗君をお守りします。」

「頼んだぞ。六耀をここで失うわけにはいかない。朔州一丸となって勝利する。」

「六耀殿、話がある。」

「総帥、その鷹は。」

「鳳凰だ。君が寝ずの看病で助けてくれた手負いの鷹だ。」

「元気になってよかった。」

「鷹の恩をお返しする。鳳凰は可汗軍の配置を伝える。鳳凰の真下が可汗だ。」

「鷹が上空を舞っていたら鷹軍の指示とわかるのでは。」

「鷹軍が出陣すれば鷹が上空を飛ぶのは当然だ。誰も怪しむことはない。狼軍の総帥の位置も報せる。必ず可汗とその息子を討ち取れ。それと奴らの側近も。傍で護衛しているから、周囲の兵を壊滅させればいい。先陣は屈強な者を配置するように。公孫氏や皇子は後方に。六耀殿も先陣は避けるように。」

「わかった。それでは鳳凰、頼んだぞ。」

背中が熱い、痺れているのか感覚がない。

鳳凰のおかげで脇目も振らず可汗を討ち取れた。狼軍の総帥も仕留めたようだ。朦朧とした意識の中で相当数の人馬が流されていくのが見えた。そして味方の歓声が上がった。

ここはどこだ。阿鷹殿は。

「六耀様、わかりますか。西華です。」

「うーん。どこだ。」

「朔州の城内です。」

「戦況は。」

「可汗、狼軍の総帥の首級は持ち帰り、狼軍はほぼ壊滅、虎軍と鷹軍は兵を引きました。六耀様の勝利です。」

「皆無事か。」

「こちらは弓隊と火球のおかげでほぼ無傷です。」

「馬は阿史那氏に戻すように。」

「はい。和議となればそのようにします。」

「眠い。」

「ゆっくりお休みください。」

「叔父上、虎軍の被害はどうですか。」

「阿鷹のおかげでほぼ無傷だ。」

「可汗と狼軍が崩れたら巻き返せません。損失は最小に抑えるが良策と考えました。」

「その通りだ。」

「これからは叔父上が阿史那氏のハーンとしてまとめてください。」

「軍力、人望、実績から鷹軍総帥の阿鷹がハーンであるべきだ。」

「わたしは全軍の総帥として、新しい可汗を支持します。」

「狼軍は鷹軍がまとめます。虎軍は可汗がまとめてください。条件があります。」

「何でも聞くぞ。」

「公孫氏率いる国境の州と和議を結び、交易によって民が平安で豊かに暮らせるようにしてください。もう無益な争いはしたくない。長安も警戒しなければならない。国境の州と盟約を結ぶのは互いに有益です。」

「その通りだ。」

「いま鷹軍は食糧危機や干害もなく自給自足です。もう略奪によって食糧を調達するには限界です。」

「どうすればいいのだ。」

「お任せください。落ち着きましたら鷹軍がお手伝いします。但し、略奪や戦を繰り返すのなら、鷹軍一丸で叔父上を潰します。」

「もう身内の争いはこりごりだ。それに阿鷹には敵わない。」

阿史那氏は虎軍の総帥がハーンとなり、全軍の総帥として阿鷹が仕切ることになった。草原の兵や民は戦が終わることを喜び、総帥阿鷹を支持する。草原の覇者、阿史那氏が生まれ変わるのだ。これも六耀のおかげだ。

## 草原の天女

六耀は第四皇子によって城内に運ばれ、侍医の手当てを受ける。

「皇子、かなり深手です。二晩ほどで熱が引けば安心です。王女は武芸で鍛えられたお身体で幸いでした。並の人間であれば命はないでしょう。お目覚めになりましたらお呼びください。控えております。」

「ご苦労。玉齊はまだか。」

「はい。朗君が重症であると報せを受けて、早馬でこちらに向かいました。そろそろ着く頃かと。外が騒がしい。」

「耀歌の容態は。邪魔だ、どけ。」

玉齊皇子だ。

「兄上、耀歌は。」

「早かったな。高熱が出るが、命は助かった。数日で目が覚めるだろう。」

「わたしが傍についています。耀歌はわたしの愛する人です。いずれ妃にと考えていました。良かった、助かって。先陣を切ったと聞いています。兄上、耀歌は女子ですよ。」

「一度言い出したら引かない性格は知っているだろう。耀歌の気持ちは確かめたのか。」

「完治したら聞きます。」

耀歌はこちらに来てから鷹師の軍営で暮らしている。幸い女子とは知られていないと聞いた。果たして玉齊を受け入れるだろうか。常に傍にいる鷹軍の総帥は、眉目秀麗、最上の軍神といわれる好漢で、耀歌の命の恩人だ。耀歌の気持ち次第だろう。

「阿鷹、玉齊皇子が朔州に入った。城内の六耀殿を寝ずに看ているらしい。」

「え・・・第五皇子が朔州に。」

「しばらく療養したら泉州に連れて帰ると聞いた。このままでは会えなくなるぞ。」

「五兄、わたしは心配ないので泉州へお戻りください。いつまでも城を空けるわけにはいきません。」

「耀歌、一緒に泉州へ戻ろう。そしてそのままわたしの傍にいて欲しい。昔から許嫁なのだからいいだろう。」

「五兄、わたしはもう城の暮らしには戻れません。城下を追われたわたしには、草原で遊牧民と共に暮らすのが性に合っています。」

「この件はまたゆっくり話そう。ひとまず泉州に戻る。ゆっくり養生するように。」

草原の暮らしが合っているなど、耀歌は何を考えているのだ。高貴な血統である將軍府の王女だぞ。病み上がりのいまは何も言うまい。説得する時間は十分にある。

まだ長安にいた頃に、将来五兄と夫婦になると父に言われたのを思い出した。もうだいぶ前の話で、いまは情勢も大きく変わった。今更過去には戻れない。わたしは王女ではない、鷹軍の軍師だ。そして何より阿鷹が好きだ。

「朔州から伝令だ。第五皇子は泉州に戻る。六耀殿はそろそろ朔州を出るようだ。香姜、西華が準備している。」

「いつかわかるか。」

「5日後の早朝、馬車で出発だそうだ。香姜からの伝令だから間違いない。」

「よし、朔州との国境で出迎えるぞ。護衛も必要だ。」

「はい。」

「香姜、軍営に伝令を。」

「はい。」

「出発の日を総帥に伝えて欲しい。」

「わかりました。軍師の鷹、阿修羅が伝令を運びます。」

「それは心強い。このまま長引けば五兄との婚礼話が現実化してしまう。もう城の暮らしはたくさんだ。早々に草原に帰ろう。」

「はい。わたしも都の暮らしはもう無理です。自由な草原が懐かしいです。」

「香姜、西華も草原の民だな。」

「四兄、お世話になりました。傷も癒えたのでそろそろ草原に戻ります。侍医の許しも出ました。鷹軍も心配していることでしょう。」

「草原がいいのか。」

「はい。長安にいた頃より情勢は驚くほど変わりました。もうわたしは將軍府の朗君ではなく、国を亡くした流浪の民でしかありません。いまはやっと辿り着いた草原がわたしの国です。五兄との話も長安で終わったことです。それに城は窮屈です。」

「五弟が耀歌をあきらめるとは思えないが、ここに留めておくこともできない。あまり無理をせず、十分傷が癒えるまで養生するように。香姜、西華、耀歌を頼んだぞ。」

「はい。承知しました。」

それぞれの馬を引き、耀歌は馬車に。鷹の阿修羅が空を舞う。

「阿修羅の真下が六耀殿の馬車だろう。」

「阿楊、先に行くぞ。」

香姜、西華を先頭に六耀の馬車が見える。

「六耀様、阿鷹様です。どうやらお迎えのようですよ。」

「阿鷹殿が……。香姜、手を。」

耀歌はすぐに馬車から降りる。阿鷹も冬雪を降りて走る。阿鷹は耀歌を思いきり抱き締めた。

「耀歌殿、会いたかった。」

「え……。いまなんて。」

「耀歌王女、ずっと以前から気づいていた。」

「なんでいままで……。」

「告げたら耀歌殿が離れていきそうで黙っているしかなくて。」

「わたしも六耀だから傍にいられると。女子とわかれば、軍営を追い出されるかと怖かった。」

「共に草原へ帰ろう。」

「はい。」

阿鷹に守られながら、耀歌一行は鷹軍全員に迎えられ軍営に戻った。

長安の秦王府では、阿史那氏の可汗が朔州の公孫氏に敗北し、内政が大きく変わったと報告があった。

「陛下、公孫殿下をはじめ、玉晋、玉齐皇子は阿史那氏と終戦、和議を結び国境の州を治めています。国境4州は兵力、民力も強大で、阿史那氏最強の鷹軍とも良好です。秦王の配下で攻撃しても撃退されます。公孫殿下は長安を攻める意志はなく、このまま国境4州を任せてはどうでしょうか。そうすれば草原の阿史那氏に脅かされることもないでしょう。長安により近い崑崙、銀閣、居水は趙王殿下が守りを固めていますので問題ないと考えますが・・・。」

「確かにこれ以上の戦で国を衰退させるわけにはいかない。いまの唐にそこまでの戦力はない。国境と草原はこのままに。いまは国を繁栄させることだ。」

秦王は唐を一つにするには時期尚早と判断した。草原と砂漠に隣接する国境の治政は、公孫氏に委ねることに、残り3州は趙王に。まずは静観することにする。

趙王に近い李宰相は、野心家でありながら姑息で狭量だ。

「刺客を放て。狙いは朗君、耀歌王女だ。朔州と阿史那氏の戦も軍師は朗君だった。皇子を超える相当の策士だ。間者の報せでは鷹軍に守られている。慎重に時機を見て仕留めろ。護衛の二人も相当の手練れだ。軍営を離れた時を狙え。これからもっとも目障りな存在になる。」

「殿下、長安の秦王より、国境4州はこのまま公孫氏で治めよとの勅命です。」

「今更国境を攻めても、勝算がなく疲弊するばかりとの判断だろう。確かにそうだ。あやつも馬鹿ではないよ。あとは趙王に任せるか。あいつはかなり野心家だ。甘いぞ、秦王。」

朔州と阿史那氏の戦によって、新生阿史那氏が誕生、最強の鷹軍とともに国境4州、朔州、泉州、幽州、広州が繁栄し、草原に戦のない平安が訪れた。国境を守り続けた公孫氏は、草原や砂漠との交易を推奨し、明君と民に称えられる。そして豊かな暮らしを求めて民は国境の州へと移っていく。

耀歌の改革で、阿史那氏は益々豊かになる。民力によって自給自足が叶い、他国との交易も盛んになる。国境の州は草原の民と中原の民が往来し、他国からの人や物が動く。

梅の香りが漂う軍営に学舎を作り、染色、機織りを教え、窯業も盛んに。色彩豊かな美しい衣は国境で飛ぶように売れる。

耀歌と阿鷹は、幕営を散歩する。

民から次々にからかわれ、2人は照れる。

「総帥、六耀様は男装の麗人だったのですね。どうりで常人にはない美しさです。」

「総帥、六耀様が女子でうれしいでしょ。早く求婚しないと中原に奪われますよ。」

「天女様を娶って、もっと鷹軍を豊かにしてください。」

「耀歌殿、感謝する。戦もなく食糧不足も解消された。阿史那氏の逸品が生まれ交易も盛んだ。妓楼や羊鍋も繁盛している。」

「それはよかった。元来草原の民は賢く器用です。柔軟な対応力に感服します。」

夜更けに耀歌は阿鷹の幕舎の前に佇む。室内から光が漏れる。まだ起きている様だ。足が痺んで前に出ない。自分は度胸も勇気もあると信じていた。でも阿鷹を好きであればあるほど、失うことを恐れて何も言えない。耀歌は結局声もかけずに自分の幕舎に戻っていった。

「阿鷹、耀歌殿が幕舎の前に立っていたけど、そのまま戻ったようだな。」

「阿楊、教えて欲しい。耀歌殿に求婚する。」

「いよいよか。」

「どうしたらいいかわからない。阿楊なら女子の扱いに慣れているだろう、教えてくれ。」

「なんたって貴族のお姫様だからな。策を講じないで、草原の勇者らしく、気持ちをありのままに伝えればいいのでは。」

「決めた。今晚は月が美しい。気持ちを伝えよう。」

「西華、自分の気持ちをどうやって伝えたらいいか。」

「將軍府の姫らしく、ご自分の気持ちを率直に伝えるのもいいですが、もしかして愛の告白ですか。」

「好きという気持ちを伝えたい。」

「総帥ですか。」

「阿鷹殿以外誰がいるのだ。」

「それは素晴らしいことです。阿鷹様は耀歌様を心より愛しています。待てば向こうから告白されるのでは。草原の勇者と名高い鷹軍の総帥が、女子に先に告白されるわけにはいかないと思います。」

「先程、阿鷹殿の幕営前で足が止まってしまった。離れていってしまうようで怖い。」

「総帥も同じ思いだから、なかなか踏み切れないのでは。待ってあげましょう。」

「人を好きになるって尊い。初めて好きになった男子が阿鷹殿で幸せだ。」

「耀歌様と総帥は相当深い縁だと思います。」

しばらくして阿鷹は耀歌の幕舎へ。明かりが漏れる。いざ幕舎の前に立つと足が痺む。女子であることが周囲に知られたこともあり、以前のように気軽に入れない。

そこへ背後から声がかかる。西華だ。

「総帥、夜分にいかがしましたか。耀歌様は幕舎内にいます。耀歌様、総帥がお見えです。総帥、どうぞお入りください。」

「ああ。」

「阿鷹殿、夜分にどうしましたか。」

「いや、通りかかったら明かりが漏れていたの。」

「耀歌様、総帥、わたしはこれで。ごゆっくり。」

西華は気を利かせたのかすぐに退散した。

2人は向き合ったまましばらく沈黙が続く。

「あの…総帥、何か。」

「ああ・・・月が美しいので散歩でもと思ったから。」

「草原の月は美しいです。是非。」

幕舎を出て並んで月を眺める。

阿鷹は耀歌の手を取り向き合った。

「耀歌殿、わたしの傍にずっといて欲しい。草原で暮らそう。」

「それは求婚ですか。」

「そうだ。妻になって欲しい。」

「総帥とは逃避、戦、襲撃と物騒な日々を送ってきましたが、そろそろ女子として幸せになりたいと願っていました。」

「承諾してくれるか。草原の民として一緒に生きてくれるのか。」

「はい。他の女子には目もくれないと、わたしだけを愛すると約束してください。」

「出会った時からわたしの心に入り込んだ。そして女子とわかったときは、喜びでおかしくなりそうだった。妻には耀歌殿しか考えられない。草原の将が幸せにすると約束する。」

「はい。わたしは阿鷹殿を心から愛しています。何にも代えられないほど深い愛です。」

阿鷹は思いきり耀歌を抱きしめた。

耀歌は深く広い阿鷹の胸に顔をうずめた。すうっと薄荷（ハッカ）の香りがする。

西華と香姜は幕舎の影からそっと見守っていた。

「純粹すぎる。一流の軍師なのに愛の告白はじれったくてイライラ。やっただね。おめでたいことなんて本当に久しぶり。草原の婚礼って初めてだから、軍師に聞かないとね。婚礼衣装は深紅の衣で。」

「ああ、王女様の婚礼なんて自分のことよりうれしい。」

背後から声が・・・。阿楊軍師だ。

「最高の軍師と最強の戦士が夫婦になるなんて、こんなに素晴らしいことはない。」

「阿楊殿。まさにそうですね。気がかりなのは玉齊皇子です。」

「許嫁とか・・・。」

「まだ長安にいた頃に王女も幼かった。」

「鷹軍から奪い取ることはできない。泉州の皇子も、二人が夫婦になることをいずれは知るだろう。」

「はい・・・。」

幕舎に戻った耀歌は顔が火照りなかなか眠れなかった。ハッカの香りに包まれている感じだ。

阿鷹殿と夫婦なんて。蹴鞠試合の出会いから深い縁を感じていたが、まさか想い人になるとは。もう命を狙わ

れる生活は嫌だ。一生阿鷹殿に守られたい。わたしはやはり女子だ。政争や戦とは無縁な家庭を作りたい。

耀歌が好きだ。全身全霊で愛している。決して離さない。これから阿史那氏は戦のない安定した治政で豊かになる。そのためにも唐の侵略に備えた防備と兵力は一層必要だ。国を超えて人が流れるいまは、刺客にも注意しなければ。唐の宰相は耀歌の抹殺に執念を燃やしていると聞く。もし耀歌に何かあれば唐を潰す。婚礼は月が輝く中秋月がいいか。

阿鷹の長い夜が明ける。

## 忘却の彼方へ

ここは・・・

頭が割れるように痛い

臉が重い

身体が痛い

夢か、現実か、なにもわからない

「意識が戻ったようだ。すぐに可汗に報せるように。」

「可汗、けが人の意識が戻りました。」

「何か話したか。」

「話すことはできないようです。手当てをしたところ男装をした女子でした。」

「なに、女子か・・・。意識が戻るまで傍を離れるな。」

「はい。」

女子とは気づかなかったが、気品ある美しい容姿だ。回復したら話を聞いてみよう。

「気が付きましたか。」

「はい。ここはどこですか。意識が朦朧としています。」

「いまはゆっくりお休みください。」

女子はまた深い眠りに落ちた。

鷹軍は男衆総出で狩猟に。耀歌は妓楼へ梅酒を届けるついでに生地を求めて泉州へ。

冬に向けての衣替えだ。草原の服装にはまだ慣れず、泉州で作る。

鷹軍の引く馬車に4騎の護衛だ。香姜と西華は薬草採取に向かった。中秋月が過ぎれば、いよいよ冬支度が始まる。

妓楼に梅酒を届け、泉州の街を歩く。阿鷹に藍色、耀歌は紅色、香姜と西華に薄紫、草色の生地を買う。ふと婚礼用の真っ赤な衣装が目についた。近いうちに袖を通すのか・・・だとすれば夢のようだ。

軍営の土産に菓子を大量に注文する。

「耀歌様、そろそろ戻りましょう。」

男衆によって荷が積まれ、帰路に。

国境近くの林道で馬車が急停止。

「耀歌様、刺客です。逃げてください。」

馬車を飛び降りると黒装束の刺客が10名程襲い掛かる。

「狙いは將軍府の朗君。追いかける。」

耀歌は馬を馬車から離し跨り駆けだす。矢が次々と放たれ耀歌の肩を射抜く。方向を失いそのまま馬もろとも崖下に転落する。

阿鷹殿に会いたい……。意識が薄れるなか、阿鷹を想いながら崖から真っ逆さまに落ちていった。

鷹軍の護衛が刺客を討ち取り駆け付けた時には、岸壁から延びる枝にかかる耀歌の衣の端切れしかなかった。

「すぐに川を探索するぞ。一人は軍営に報せる。」

この襲撃は狩場の宿営地に速攻で報せる。

「阿鷹、大変だ。」

「阿楊、どうした。」

「耀歌殿が襲われた。」

「え……。」

「泉州の帰りに刺客に襲われ、崖から落ちて行方不明だ。」

「護衛は……。」

「10名の刺客は討ち取った。狙いは耀歌殿だった。いま川を探索しているがまだ見つからない。あそこからだ生存は難しい。」

「何が何でも探し出せ。すぐ戻る。」

「虎伸様。ここから軍営まではまだあります。今晚は川の畔で宿営しましょう。」

冬支度に向けての狩猟としてはまずまずの収穫だ。戦もなく食糧不足に苦しむことがなくなったが、やはり冬は厳しい。鷹軍は知力に長け羨ましい限りだ。なんでも水を操る天女がいるとか。ぜひ会ってみたい。それにしてもまだ可汗という呼称に馴染めない。

阿史那氏の可汗、虎伸は朔州公孫氏に滅ぼされた前可汗の義弟だ。とはいえ息子程の若さだ。最強を誇る鷹軍総帥から推挙され可汗となった。叔父、甥の関係で虎伸の方が年長ということからなのか。

「戦を好まず、民を愛する叔父上こそが、これからの阿史那氏をまとめ上げるのです。わたしは軍の均衡を保ち唐の攻撃に備えます。」

阿鷹の一言で決まったのだ。確かにわたしでは軍を掌握することは不可能だろう。

「虎伸様、けが人が混乱しているようです。」

虎伸はけが人のいるゲルに向かった。

「どうしたのだ。」

「ご自身がわからない様子。落下の衝撃で記憶が欠落しているのかもしれませんが。」

「治るのか。」

「身体が回復して時間が経てば断片的に戻るかもしれませんが。」

けがをした女子は目を見張るような美しさだった。開かれた大きな瞳、透き通る肌、興奮のせいか薄紅色に輝いている。

「あなたは誰ですか。わたしをどうするのですか。わたしは誰ですか。どうしてここにいるのですか。」

「あなたは川に流され瀕死だったのを、近くで宿営していたわたしたちに助けられたのだ。矢が刺さりかなり

の深手を負った。ここは狩場の宿営だ。明日軍営に戻る。思い出すまでゆっくり養生すればいい。」

「名前もわかりません。」

「ゆっくりじっくり焦らずに思い出すことだ。」

「馬車と侍女を用意しろ。明日軍営に連れて行く。軍医も待機させろ。」

翌朝虎軍は宿営を去り、軍営に向かった。

虎伸の軍営では女子のゲルが用意され軍医が待機していた。

「虎伸様、あの女子はかなりの距離を流されてきたらしく、身体中傷だらけで矢傷も相当深いです。武芸で鍛えられているので何とか助かったのです。記憶はある日突然思い出すかもしれませんが、まだ当分は無理でしょう。あの女子は多分中原で育ったのでは。それもかなり高貴な生まれです。」

「なんでわかる。」

「持って生れた美しさや気品というのは、男装であっても隠し切れませんから。」

「中原の医師だったお前が言うのならそうなのだろう。傷痕は残るか。」

「いえ、残らぬように処置しました。」

「よかった。まだ若い、頼んだぞ。」

落下した岸壁から崖下一帯の搜索が始まった。鷹軍総出だ。

「いいか、亡骸だったら真っ先に軍師に報せろ。総帥には内密だぞ。」

「付近の村から情報を集めろ。誰か見ているかもしれないし、助けた者がいるかも。中流から下流にかけてくまなく探せ。」

まるで消えたように見つからなかった。

「神隠しか、誰かが連れ去ったのか。なんで見つからない。わたしの妻になる女子だぞ。」

「これだけの人間が探しているんだ。きっと見つかる。耀歌殿は死ぬことはない。誰かに助けられて養生しているのかもしれない。」

阿楊は近隣の村に人をやって探すことに。あれだけの器量なら目立つはずだ。幸い亡骸はない。希望は十分にある。そう言い聞かせる。

「総帥、残された荷台には、わたしたちの生地と共に総帥の生地もありました。耀歌様が大好きな藍色は総帥に似合うと言ってましたから。あと……」

「なんだ、香姜、言え。」

「婚礼用の面紗がありました……ご自身で買い求めたようです。濃い赤に金糸の刺繍が美しい面紗です。」

「……。わたしとの婚礼を心待ちにしてくれていたのか。」

「はい、とても。その日のためにお預かりします。」

「阿楊、もし耀歌に何かあれば長安を許さない。宰相を調べさせてくれ。必ず殺す。鷹軍の恐ろしさを思い知らせるのだ。」

「わかった。」

耀歌は日に日に回復していった。虎伸は毎日様子を見にゲルに通った。

耀歌は草原や馬の話をしてくれる虎伸の来訪が楽しみになっていた。

「名前は思い出したか。」

「いえ。」

「では麗月と呼ぼう。麗しい月、ぴったりではないか。」

「恥ずかしいです。」

「回復にもいいというので、わたしと馬に乗ってみるか。」

「はい。わたしは乗れるのでしょうか。」

「その手を見ると、騎乗も武術も相当な腕と見受けられる。馬の用意を。」

「この馬は春月、わたしの馬は冬月で親子だ。可愛いがって欲しい。早速明日朝に馬駆けだ。」

「感謝します。」

「衣はこの侍女に申し付ければ数刻で縫い上げる。生地は中原の物を用意した。望みを言ってくれ。即刻作らせる。」

「はい。」

「夕餉は月を愛でながら楽しもう。用意させる。」

麗月は紅色の生地を選び、幾重にも生地が重なる羽衣のような衣を頼んだ。なぜかずっと着ていた気がするのだ。そして藍色の生地を幾重にも重ねながら広がりを抑えた衣と、騎乗衣をそれぞれ数着ずつ侍女に依頼した。

肉の焼ける香りと焚火の音がする。

「麗月殿、そろそろ準備ができたぞ。」

ゲルから出てきた麗月は深紅の衣を纏い、この世のものとは思えない美しさだ。野性的な草原の女子の容貌を見慣れた虎伸には衝撃的だった。

「虎伸様、あの行き倒れた女子ですか。」

周囲の者も驚きを隠せない。

「虎伸様、いかがですか。」

「・・・いや本当に美しい。言葉もない。」

「虎伸様、わたしは初めて縫いましたが、衣の美しさはもちろん、髪を整えお化粧した麗月様には見惚れてしまいます。」

虎伸は麗月から目が離せない。ただただ見惚れているだけだった。

このまま記憶が戻らなければずっと共にいられる。どうすればいいのか。麗月がどんな素性であってもかまわない。

肉の焼ける香り、なぜか懐かしい。焚火の周りで踊る民の笑い声が心地よい。以前も草原で暮らしていたの

か。満天の星が美しいこの場所がまるで自分の家のような。

「阿楊、いまは戦もなく鷹軍も平穏だ。わたしは耀歌を探しに行く。耀歌は鷹軍総帥阿鷹が命を懸けても守り抜くと決めた存在だ。何としてでも地の果てまでも探す。」

「すでに香姜と西華は泉州に入った。朔州まで限なく探すそうだ。刺客のこともあるので耀歌殿のことは鷹軍しか知らない。阿修羅を伝令に使うので鷹笛を持たせた。逐一報せが入るだろう。」

「必ず草原に連れて戻ってくる。鷹軍は阿楊にしか任せられない、頼む。」

「任せておけ。」

春月に跨りまるで飛ぶように草原を駆る麗月の騎乗は最上級だ。最高の騎手といわれる阿史那氏の可汗は驚愕した。

「わたしは馬に乗れるのですね。」

「記憶を失っても以前の習慣や好みは身体が覚えているものだ。焦ることはない。」

「肉の焼ける香りや、燃えるような夕陽が懐かしいような。衣も身体に馴染みます。虎伸様、この地は水不足や干害はどうですか。」

「乾季には悩まされる。家畜や牧草の生育が悪く食糧供給が不安定だ。」

「上流からの水を軍営に行き渡らせ清流を確保します。人工を集めてください。」

「水を軍営にか。信じられない。」

「お任せください。どうやら記憶がなくても、知恵は喪失していないようです。」

麗月は耀歌同様に、水車の図面を描き、木を伐採し、組立を指示。軍営に万遍なく水が流れ込むように水路を作り、中央に水場を設置した。大小の水路によって牧草地は枯れることなく家畜が飢えることもない。水場の四方は砂利、砂、布によって濾過され安心安全な飲み水を供給。氾濫を防ぎ貯水可能な溜池は水不足を無くす。

土地を耕し作物を育て、薬草を栽培する。厳冬に備え、いくつもの家畜小屋を作り、軍営は食糧不足から解放される。次から次へと軍営を豊かに変えていく麗月は、誰からも尊敬される存在だ。

「虎伸様、きっと天が麗月様を与えてくれたのです。虎伸様が命を助けたのは良縁だからです。ぜひ婚礼を。」

「まだ記憶が戻らないのだ。」

「これからお二人で積重ねていけばいいのです。」

「今晚は月が美しい、皆で宴だ。」

「虎伸様、衣を作っていただいたので忘れていなければ舞を披露しますがいかがですか。」

「是非、中原の舞を見せてくれ。」

草原の民は歌、踊り、楽器すべてに秀でた民族、宴は本当に楽しい。

中央に設置された舞台に深紅の衣を纏う麗月が。琴の音に合わせしなやかに舞う。高く上がる脚、妖艶なまなざし、幾重にも広がる衣。まるで天女の舞だ。

「見ろ、虎伸様は天女から目が離せない。もしかして惚れたか。」

「美しく、知性に溢れ、舞も最上級となれば、虎伸様の心を捉えるのは当然だ。」

「いったいどこから来たのだろうか。このまま記憶が戻らなければいいのに。」

草原の民が見つめる幻想的な舞を終え、拍手喝采のなか麗月は舞台から引く。

頭が痛い。この舞を覚えている。どこで披露したのか。断片的に人が溢れる華やかな場面が浮かぶ。大勢が羊鍋を囲む。誰かが麗月の手を取り抱き寄せる。

「耀歌、離さない。」

耀歌って誰のこと。わからない。

麗月は気を失った。

「麗月、気が付いたか。わかるか。」

「虎伸様……。ここは。」

「麗月の寝台だ。気を失ったのだ。素晴らしく美しい舞だったぞ。ゆっくり休んでくれ。軍営全員が麗月の虜だ。」

「恥ずかしいです。断片的に景色が頭に浮かんで……。目が覚めたらここに。」

「何か思い出したか。」

「いえ。」

「焦らなくていい。ゆっくり休め。」

虎伸は不安だった。断片的であっても麗月の記憶が甦っているのか。

「軍医、記憶は必ず戻るのか。それともずっと戻らず新しい人生を送るのか。」

「記憶は戻りますが、いつかは断定できません。身体で覚えていることをすれば、断片的に場面が甦ることもあります。それが続けば戻ることもあります。麗月様の場合はまだそこまではいかないかと。」

「そうか。」

「虎伸様、麗月様と日々を楽しく過ごせば、過去の自分を思い出すことなく、いまの生活に馴染んでくるでしょう。」

鳳凰が頭上から降りてきた。阿楊からの文だ。

「阿鷹、香姜からの文で、耀歌殿が岸壁から落ちた頃、阿史那氏の可汗が狩猟で宿営していたことがわかった。岸壁からかなり先にある下流の畔だ。もし流れが速ければその日に下流まで流されただろう。虎伸殿は耀歌殿を知らない。もしかしたら虎軍に助けられているかもしれない。阿楊 筆」

「まずは軍営に探りを入れて欲しい。耀歌が無事ならとっくにこちらに戻っているはずだ。動けないほどのケガがあるいは……。よろしく頼む。すぐに軍営に戻る。」

阿鷹 筆」

阿楊は早速虎伸の軍営に遣いを出す。

「阿藤、しばらく逗留して様子を探れ。もし耀歌殿がいたら鷹を飛ばせ。いいな。」

阿鷹は耀歌の無事を祈るばかりだ。ここ数カ月離れている辛さが心身に刺さる。虎伸の軍営に助けられたのなら無事だ。執拗な刺客に遭遇していなければいいのだが。あの日が悔やまれてならない。

麗月は虎伸と毎朝馬を駆り、薬草や作物を育てる。気さくに軍営の民と話し、共に農作業に励む。ここ数日は梅林の手入れだ。

「実がなれば収穫して梅酒を造ります。是非朔州で売りましょう。」

水車を組立て、水を軍営に行き渡らせる。梅の苗木を植え梅酒を造る。薬草を栽培し、土地を耕し作物を育てる。家畜の成育も順調だ。まさに麗月のおかげで自給自足、憧れの暮らしが営まれている。

誰かと薬草を栽培している。女子の声が反響する。

「耀歌様、これは乾燥させますか。」

「これは煎じますか。」

水場を見に行くと

「耀歌様、清流のおかげで食事が美味しいです。」

「安心して水が飲めるなんて夢のよう。」

牛馬舎や鶏小屋を覗くと

「耀歌様、無事に子牛が産まれました。」

「鶏卵がたくさん採れました。凍死することもなく助かります。」

「駿馬が仔馬を産みました。きっと阿鷹様が喜びます。」

まるでこの景色と変わらない風景が甦る。

阿鷹様って誰か……。それに耀歌って。頭が激しく痛む。麗月は倒れこんだ。

阿楊の遣いで阿藤が虎軍に入る。そこはまるで鷹軍のような景色だった。梅の香り、水車、水路、家畜小屋、畑があり民が農作業を楽しんでいる。機織りの音も聞こえる。

ここは鷹軍か。天女がいるに違いない。耀歌様だ。

「鷹軍の阿藤だ。いつの間に梅林が。」

「阿藤殿、軍師の遣いですか。これは麗月様のおかげです。天から降りてきたのです。」

「麗月様……」

「はい。」

「どこから舞い降りたのか。」

「何でもケガをしていた麗月様を可汗が助けて軍営で養生していたのです。」

「どこにいるのだ。」

「虎伸様の隣のゲルです。それは美しく知力に長けた天女様です。虎伸様は麗月様を大切に想っています。」  
耀歌様だとしたら大変だ。でも麗月様と。

西華殿を呼び寄せる必要があるな。女子でなければ確かめられない。

目を覚ますといつもの光景が。

「虎伸様。ここは。」

「頭を抱え込んで倒れたのだ。」

「はい。ここと同じ景色が甦りました。そこで「阿鷹様」とわたしが呼んだ気がします。阿鷹様ってご存知ですか？」

阿鷹とは鷹軍の総帥のことか。ここと似た景色ということは鷹軍にいたのか。なぜ中原の女子が鷹軍に。阿鷹を知っているのか。

「いやここにはいない名だ。」

「そうですか。女子もいましたが見覚えのある顔だったような・・・。」

「気になるか。」

「いえ、そのたびに頭が割れるようで・・・もういいです。」

阿修羅が阿楊の頭上に舞い降りる。

「軍師、虎軍はまるで鷹軍の様相です。梅の香りが漂い、水車から清流が水路に入り自給自足が営まれ、家畜小屋、薬草小屋があり畑で作物を耕しています。ここに耀歌様がいるようです。けがをして可汗に助けられた麗月という女子が数カ月前から逗留しています。西華殿に確認させます。まだ総帥には内密に。確かめてから報せた方がいいのでは。判断は軍師にお任せします。阿藤 筆」

「西華殿、虎軍に天女様と敬われる麗月という女子が逗留している。まるで鷹軍のように改革しているらしい。耀歌殿ではないかと思うのだが、虎軍に素性を隠す必要はないはずだ。阿藤がいる。すぐに軍営に入ってくれ。阿楊の遣いといえば問題ない。阿楊 筆」

崖から転落し、下流まで流されたとしたら相当の衝撃を受けたはずだ。頭を強く打って記憶喪失も考えられる。身体中傷だらけで回復にも時間がかかるはずだ。虎軍を鷹軍のように改革できる、耀歌様でなければあり得ない。軍師の文の麗月とは耀歌様に間違いはない。ともかく軍営に入らなければ。西華は朔州から可汗の軍営に向かった。

「西華殿、わたしでは耀歌殿か確認できない。朝は可汗と馬駆けをして、日中は薬草を栽培するゲルか民に読み書きを教えている。あとは可汗が一緒だ。わたしでは近寄れない。」

「わかりました。任せてください。明日夕刻に水場で会いましょう。」

西華は薬草の香りが立ち込めるゲルに向かう。女子数人がいるようだ。

阿鷹は鷹師軍営に帰還した。

「阿楊、耀歌は虎軍か。」

「阿藤では直接確認できないので西華殿が軍営に入る。いまは連絡待ちだ。もし耀歌殿であったらどうするつもりだ。」

「もちろん連れ戻す。」

「記憶が失われていれば強引に連れ戻すのは危険だ。それに虎伸が離さないだろう。」

「耀歌はわたしの妻になる女子だ。」

「記憶が戻るまで待て。必ず戻るから。阿鷹と耀歌殿は天命によって結ばれる。焦るな。」

「わたしのことも忘れていてと・・・。」

「まずは西華と阿藤に任せることだ。」

「麗月様、芍薬、橙皮、竜胆は煎じますか。」

食欲不振や臓腑の痙攣で、宴の翌日に多く所望されます。草原の民は酒豪が多く薬湯頼みです。」

「あなたは。見慣れない顔だ。」

「薬草を学びにきました西華といいます。」

「中原人か。刺繍や裁縫はできるか。」

「もちろんです。泉州の宮中で侍女をしておりました。」

「それはうれしい。可汗の許しがもらえたら傍にいて欲しい。」

「はい。」

「麗月様、虎伸様が、古傷が疼くとのことですが。」

「消炎作用のある薬草をお持ちします。西華、蓬とオトギリソウを用意して。」

「はい。」

「虎伸様、この傷は最近ですね。患部に塗ります。」

「すぐに手当てができなかったせいか、なかなか治らないのだ。」

「西華という泉州から来た女子を傍においていいですか。」

「泉州からか。」

「はい。薬草を学びたいと、鷹軍の遣いと共にこちらに来たようです。」

「阿藤とか。」

「はい。」

「麗月の好きにすればいい。」

「ありがとうございます。よき友になれそうでうれしいです。」

鷹軍の遣いと一緒に泉州から来た女子とは。麗月が望むなら仕方ない。様子を見よう。

「西華、虎伸様に枕を作って差し上げたい。命の恩人にお返しがしたいのだ。」

「はい。作りましょう。」

「生地はこれで。」

「虎伸様は麗月様の想い人ですか。」

「わからない。わたしはケガで記憶を失い自分が誰なのかもわからない。」

「時が経てば少しずつ思い出すでしょう。」

「草原を懐かしく感じる。どこにいたのか。いまは命の恩人である虎伸様に報いたい。」

「耀歌様はまるで記憶を失くしている。わたしのことも思い出せないようだ。虎伸様はそんな耀歌様を大事にしている。記憶を戻すためにも何か策を練る必要がある。」

「確かに軍営は可汗と耀歌様の婚礼を望む声が多い。このまま可汗に嫁ぐことになれば総帥が黙っていない。」

「朔州の殿下に事情を話し協力してもらおうのほうか。」

「早速朔州に向かってくれ。」

「わかった。」

「麗月様、衣の生地を買いに朔州に行ってきます。」

「では深紅の生地と、虎伸様の衣に白の生地をお願い。西華も好きな生地を買ってくる様に。馬はどれでも好きに選ぶといい。」

「承知しました。」

西華は朔州に向かった。

「公孫殿下、耀歌様は李宰相の刺客に急襲され、大けがを負っていま虎軍に逗留しています。崖からの落下で頭に衝撃を受けて記憶が消滅しているのです。」

「なに、記憶が。」

「はい。まるでなく、虎軍では麗月様と敬われ、水路を引き、自給自足で軍営を豊かにしています。まるで鷹軍のようです。」

「阿鷹殿は。」

「記憶のない耀歌様をいきなり連れ戻すわけにはいかず焦っておられます。」

「記憶を取り戻す方法はないのか。」

「時々、何かを思い出すのか、激しい頭痛に襲われ気を失います。」

「荒療治だが蹴鞠試合はどうだろうか。必ず耀歌は参戦するだろう。記憶を失っても好きなことや身体で覚えたことは身に付いていると聞く。激しい動きで何か思い出すかもしれない。朔州、泉州から、虎軍、鷹軍からそれぞれ選抜軍で試合をする。会場は城下の民や隊商で賑わう国境付近に設営。わたしから文を書く。西華は鷹軍に報せを。」

「はい。仰せの通りに。」

「総帥、耀歌様の記憶は戻らず朔州の殿下に相談しました。時期を見て唐軍、阿史那軍で蹴鞠試合を国境で開催。耀歌様と阿鷹様の縁が深い蹴鞠試合で何か思い出すのではとの考えです。参戦する耀歌様はわたしが傍でお守りします。虎軍には耀歌様の他に鷹軍の精鋭兵に匹敵する者はいません。耀歌様が鷹軍と共に参戦すれば、きっと阿鷹様を思い出すでしょう。開催が決まりましたら準備をよろしく願いいたします。 西華 筆」

「阿楊、蹴鞠試合の精鋭を抜擢する。朔州の国境で開催だ。耀歌も阿史那軍として参戦する。」

「蹴鞠なら記憶も戻るかもしれない。準備する。」

「麗月、蹴鞠の練習だ。」

「わたしも参加します。」

「蹴鞠ができるのか。」

「はい。」

虎軍の修練場に民が集まる。2手に分かれて練習試合だ。阿藤、西華は麗月と共に挑む。

男装の麗月は味方兵を集める。

「まずは攻守自在な雁行の陣を張る。最初に鞠を捉え左前方の西華に落とす。思いきり跳ね上がるので二人が踏み台に。そのまま落ちるわたしを支える。他は俊足の兵をそれぞれ抑えて欲しい。その隙に左から一気にわたしが駆け上がる。鞠をつなぎ敵陣最終盤で西華が高く上げる。阿藤と西華を踏み台に真正面から鞠を蹴り入れて先取点を取りに行く。」

麗月の合図で雁行の陣が組まれた。

虎伸は高台から見下ろす。

「蹴鞠に兵法を活用するとは面白い。」

開始の合図とともに鞠が舞い落ちる。麗月は二人を踏み台に跳ね上がり、さらに相手の肩を蹴り上げ鞠を西華に繋ぐ。

唐軍で鷹軍と堂々と張り合うだけあって見事な技だ。

「相手の肩を蹴り上げて鞠を奪うとは、麗月は男子をはるかに超える。」

俊足で体躯の優れた相手を抑え込み、敵陣先端まですり抜け走る西華に鞠を繋ぐ。

西華は胸で鞠を受け高く蹴り上げる。そして阿藤の背中に乗る。

そこへ左から駆け上がった麗月が、二人を踏み台にして横蹴りで鞠を押し込んだ。鈴が鳴り響き先取点だ。

「見事な連携だ。それに攻守自在の陣形が素晴らしい。麗月はどこまでわたしを魅了するのか。威風堂々としたその姿に見惚れるばかりだ。」

宙を跳ね上がる美しい肢体、飛ぶように走る姿の麗月に、虎の軍営は魅了された。

「虎伸様、蹴鞠の司令塔は麗月様で。鷹軍に勝ります。」

「麗月に見目麗しい仮面を用意しろ。」

## 砂漠の首領

「麗月様、朔州の医者に聞いたのですが、北に広がる砂漠の緑地に記憶を戻す薬草があるそうです。紫の花を咲かせるこの時期に煎じて飲むと、少しずつ記憶が鮮明になるという話でした。戦の最前線にいる兵士が恐怖や痛みで記憶を封印する症状に使われるそうです。砂漠にしか生育しないとか。」

「西華、まだ蹴鞠試合には月日がある。砂漠に行こう。」

「数日かけての旅になりますが、大丈夫ですか。可汗に相談してみましょう。」

「いや、虎伸様に相談すれば大事になる。阿史那氏は砂漠の国とは友好関係にあると聞いている。囚われたら事情を話して薬草を分けてもらえばいい。万一に備えて虎伸様から預かった虎軍の玉牌もある。」

「必ず文を残してくださいね。それこそ軍営挙げての捜索になりますから。」

「もちろん、そのつもり。」

「阿藤殿、耀歌様が北の砂漠へ薬草を採りに行く。再三仕掛けてくる長安からの刺客が気になる。わたしと共に護衛として同行して欲しい。阿藤殿は鷹を操るはず。砂漠の先導になるし、何かあれば軍営に報せることもできる。」

「わかった。まだ記憶は戻らないのか。」

「しばらくかかりそうだが、記憶を早く取り戻したいようだ。可汗には文を残すと。」

「それがいい。大事になるからな。それにしてもしつこい刺客だ。それだけ耀歌様は脅威なんだな。」

「軍師としては唐随一だから宰相にとっては脅威でしかないのだろう。耀歌様が記憶を甦らせたいと思うのは回復の兆し、何としても薬草は手に入れたい。」

早朝、耀歌は馬車に、西華と阿藤が馬で先導して北へ向かう。

北の砂漠は獫狁と呼ばれ若き首領、英楓が治めていた。厳しい環境の中、交易を重視した治政で繁栄し、屈強の軍を率いる獫狁は、獫狁と共に砂漠の2大勢力だ。英楓首領は阿史那氏鷹軍の総帥阿鷹と並ぶ若き軍神と言われ、草原の阿史那氏とは友好関係にある。

広大な砂漠には水が湧き、緑が茂る森が点在する。そこに耀歌目当ての紫色の花を咲かせる薬草があるという。

阿藤の鷹、龍鳳が旋回する真下の森に向かう。

「麗月様、龍鳳の真下が森です。その先北方が獫狁になります。」

「砂漠は広い。今晚はそこで休みましょう。」

「宰相、草原から報せです。朗君と護衛が獫狁へ向かいました。」

「獫狁へ何しにだ。」

「詳しくはわかりませんが、護衛数人とお忍びのようです。」

「殺せ。獫狁の仕業に見せかけて始末するのだ。仕留めたら阿史那氏の虎と鷹の軍営に広めるのだ。双方、朗

君を重宝している。獫狁と阿史那氏に亀裂が入れば好都合だ。すぐに砂漠に向かうのだ。」

「砂漠に点在する森をいくつも合わせた広大な土地が獫狁の中心です。豊かな国と聞いています。明日入りましょう。」

「阿史那氏の玉牌があれば入れます。」

「砂漠の地下水脈に沿って井戸を開き、牧草を育てて放牧をする。家畜の糞を肥料にして作物を育てることが可能だ。温室や貯蔵庫も昼夜の気候が大幅に変化する獫狁なら効果的だ。山の麓という地の利を生かし、水脈を確保しながら繁栄している獫狁は、素晴らしい首領に恵まれている。」

「わたしたち中原の薬学や薬草、農作物の栽培を伝授すれば、さらに国力が高まるでしょう。草原の羊鍋もきつと繁盛ですね。」

「麗月がない。朝駆けか。誰か・・・。」

「虎伸様、麗月様から文を預かっています。」

「文だと。」

「虎伸様。阿藤と西華を連れて獫狁に向かいます。記憶の回復にいい薬草を手に入れます。阿藤の龍鳳がいますので何かあれば必ず報せます。すぐに戻りますので安心してください。 麗月 筆」

「獫狁まで薬草を探しに行くとは。刺客に襲われたらどうするのだ。虎玉、20名ほど引き連れて獫狁に麗月を迎えに行くように。」

「はい。すぐに発ちます。」

「首領、大門手前の森に阿史那氏から3人が入りました。」

「潜入か。」

「いえ、間者には見えません。明日にはこちらの関門を通ります。そのさらに後方に刺客らしき兵が追っています。」

「阿史那氏の間者とは誰だ。なぜ刺客が追うのだ。阿史那氏を急襲し、獫狁に濡れ衣を着せるつもりか。」

「動きから見て後方の刺客らしき一団は阿史那氏を狙っているようです。」

「どこの刺客だ。」

「多分中原から来たのかと。公孫氏配下ではなく長安では。」

「長安がなぜ阿史那氏を。ともかく気づかれないように護衛しろ。わたしも向かう。」

「首領自らですか。」

「気になる。」

地平線が広がる砂漠の日の出はなんと美しいのだろう。砂地に陽光が映し出され、一面を黄金色に染める幻想的な景観。中原では味わえない美しさだ。

一行は獫狁城下に向けて出発だ。

英楓は精鋭10騎を従え、丘陵から耀歌一行を見下ろしていた。背後から20騎が一行に追いつく。

「麗月様。刺客です。馬車から降りてこの馬に騎乗してください。一戦交えます。」

「わかった。」

麗月は素早く馬に飛び乗る。西華、阿藤と3騎で刺客に弓矢を放つ。騎乗しながらの射的は百発百中、最上級の腕を誇る3人だ。見事に先陣を仕留めた。

麗月は両手に剣を携え馬で突進し、刺客の喉を裂く。血飛沫が飛び散る。阿藤、西華が麗月に続く。刺客の馬軍に割って入る鮮やかな剣捌きは美しく、まるで剣舞のようだ。

英楓は丘を駆け降り、弓矢で残る兵を仕留める。砂地は血に染まり、20騎の刺客は瞬く間に一掃された。

「加勢していただきありがとうございました。」

わたしどもは阿史那氏から葉草を目当てに旅をしています。これから漠北の城下に入るつもりです。」

男装ながらまるで天女のような神々しい姿に、思わず息が止まる。

「見事なまでに美しい攻撃だ。城下まで案内しましょう。」

英楓の心を耀歌のすべてが捉えた瞬間だった。

英楓の一団を先頭に、漠北の中心へと向かった。

関門の守衛は首領の姿に驚き整列。

「お帰りなさいませ。」

「客人を城内まで案内するように。」

「ここからはわたしどもがご案内します。」

人々が賑わう市場を抜け、守衛の案内で城門をくぐる。砂漠の国とは思えない緑豊かな庭園の先に絢爛豪華な皇宮が見えた。

「麗月様、草原とは趣がだいぶ違う光景ですね。」

「隊商が行き交い、交易盛んな城下町の賑わいも見事だが、皇宮も素晴らしい。長安とは異なる荘厳かつ強靱な造りだ。」

「あの武人は一体・・・。」

「皆が拝礼するところを見ると相当高位の武人だ。」

皇宮に入り大広間に案内される。奥の高座には先ほどの武人が・・・。

阿藤は武人に向かって

「漠北首領、英楓様に阿史那氏鷹軍阿藤が拝謁します。」

「首領に、阿史那氏虎軍より麗月、西華が拝謁します。先程はありがとうございました。英楓様とは知らずご無礼をお許してください。」

「相当の手練れ、さすがの阿史那氏だ。漠北へはなぜ。」

麗月が顔をあげる

英楓は麗月の気品溢れる美しさに引き寄せられる。男装しているが、どうみても中原の姫、草原の女子とは思えない。

「わたしは刺客に追われ阿史那氏の可汗、虎伸様に命を救われましたが、崖からの落下により記憶を失いました。いまは虎軍に逗留しています。こちらに記憶を呼び戻す葉草があると聞きやってきました。お譲りいただけますか。」

「ある。すぐに侍医を呼ぼう。処方聞くがいい。どうして刺客に狙われるのか。」

「それは西華から首領にお話しします。」

「わかった。部屋は用意した。案内させよう。夕食はぜひともに。迎えるのでゆっくりしていてくれ。」

「お気遣いありがとうございます。」

「西華殿、こちらへ。」

「はい。」

「なぜ刺客に狙われるのか。麗月殿は草原の女子ではないな。西華殿は護衛か。」

「麗月様は唐の大將軍である齊北王のご息女、耀歌王女です。わたしは將軍府に仕える王女の護衛です。秦王の謀反によって長安を追われ、泉州に入り、阿史那氏鷹軍の総帥阿鷹殿に命を救われました。

刺客は長安の李宰相によるもので、狙いは耀歌様です。

先の朔州と旧阿史那氏との戦で軍師を務め、兵の損失を出さずに勝利しました。

耀歌様は唐でも最上級の武人で軍師、宰相はなんとしても消し去りたいのでしょうか、執拗に追ってきます。

鷹軍に逗留しているときに襲われ、瀕死のところを阿史那氏可汗の虎伸様に救われ、記憶喪失に。虎伸様は記憶を失くした耀歌様に麗月と名を与え大切にしていますが、耀歌様は阿鷹様と想い合う仲。少しずつ記憶の欠片をつなげては激しい頭痛で気を失ってしまいます。

朔州の医者から砂漠の薬草のことを聞きやってきました。」

「長安からの刺客とは、よほどの人物なのだ、耀歌殿は。」

「はい。」

「よくわかった。阿史那氏両軍に報せるといい。あの鷹は阿藤殿だな。」

「はい。ありがとうございます。」

やはり生まれ持った気品というのは隠し切れない。まして皇族であれば当然だ。それにしても美しい。草原の勇士阿鷹の想い人であり、記憶のない今は可汗虎伸の想い人でもある。出会った今、わたしだってあの威風堂々とした容姿に一目で惚れた。

「麗月様、この紫色の花を乾燥させて煎じます。日に3度服用してください。少しずつ記憶の欠片がつながるでしょう。焦らずゆっくりと回復に努めてください。」

「はい。それにしても良薬口に苦し。美しい見た目からは想像できないほどの苦味です。

お礼に薬草の育て方と中原の処方を教えましょうか。」

「それはありがたいことです。やはり薬草の処方には中原には到底及びません。明日にでも医者を集めますのでどうかご教授ください。」

「では首領の許しを得て、数日逗留して教えます。」

「麗月様、沐浴のご用意ができましたので、こちらへどうぞ。」

ゆったりと湯に浸かり、砂漠の疲れを落とす。身体が浄化されるようだ。

幾重にも広がる羽衣のような中原の衣は、耀歌の好む紺碧に染められた生地がふんだんに使われている。髪を整え化粧をすると眉目秀麗な男子から、美しく輝く王女に変貌する。

「麗月様、男装から久しぶりのお姿です。」

「西華もその若草色の衣が美しい。砂漠の民に見初められるかも。」

いつも男装の西華も中原の美女に。阿藤も驚きを隠せない。

侍女の案内で賓客を招く「無塵殿」へ入る。

「英楓首領、お招きに感謝します。」

麗月と西華の姿にそこにいる者は息を呑む。

「麗月殿、なんと美しい衣だ。それは中原の物か。」

「はい。いかがですか。」

「いや、言葉が見つからない。」

英楓は驚きを超えて眩暈がした。なんでもっと早くに出会わなかったのか。阿鷹や虎伸をすでに魅了し、記憶が戻れば阿鷹が独り占めとは。傾国の美女、黒色天香とは麗月殿のことだ。

「首領、薬草の処方を受けていただいたお礼に、中原の薬学を伝授します。これからの砂漠は疫病で苦しむこともなくなります。数日の逗留をお許してください。」

「もちろんだ。好きなだけいてくれ。侍従の長江になんでも言うように。」

「はい。お世話になります。」

「虎伸様、鷹の伝令です。」

「漠北からか。」

「虎伸様、麗月様は漠北に入りました。刺客は漠北の首領の助けで一掃し、城内に逗留しています。薬草は無事に手に入り、ここ数日は中原の処方を砂漠の医者に伝授しています。

こちらでは歓待され、麗月様は気を失うこともなく過ごしています。どうかご安心を。

西華 筆 」

「それは何より。護衛をかねて漠北に迎えをやった。虎玉が率いている。報せが入るだろう。刺客には十分に気を付けるように。麗月をくれぐれも頼む。虎伸 筆」

英楓か。こちらも眉目秀麗でいて砂漠の戦神と敬われる好漢だ。麗月に心を奪われない男子はいない。美しいだけではなく威風堂々とした麗月は武人を虜にする。早く帰還させねば。

「総帥、耀歌様は漠北で記憶を戻す薬草を手に入れました。数日間、英楓首領の元に滞在して虎軍に戻ります。西華殿も一緒です。長安からの刺客に急襲されましたが、首領に助けられました。記憶はまだ戻りませんが、この薬草できっと耀歌様に戻るでしょう。虎伸様がこちらに迎えを寄こすそうです。刺客の心配はないようです。

阿藤 筆 」

なに、英楓の元にいるのか。若くして漠北を繁栄させ、強靱な軍を率いる砂漠の戦神と敬われている。耀歌に惚れるのは間違いないだろう。記憶を戻して早々に婚礼を挙げるのだ。蹴鞠試合まであと少しだ。

## 長安の異変と記憶

秦王、公孫殿下（涼王）、趙王は異母兄弟で、皇帝と皇后の愛息建王が皇太子、母親の身分が低い趙王、皇帝に疎まれる公孫氏は国境の州に離された。文武両道で軍を率いる秦王を妬む皇太子は、ことごとく秦王に無理難題を押し付けた。建王、秦王の諍いのたびに耀歌の父齊北王が仲裁に入る有様だった。

皇帝崩御のあと、周到に計画された先の謀反によって秦王が皇帝となり、齊北王は皇太子と共に殉死、皇宮、將軍府は壊滅した。

公孫氏は4州を束ね、第四、第五皇子と共に国力を高め、先の阿史那氏との戦で勝利し、新生阿史那氏との交易でさらに繁栄している。砂漠の国とも友好関係にあり圧倒的な国力、軍力、民力を誇る。いまの長安では到底敵わない。秦王を超える明君と讃えられ、軍師六耀を筆頭に逸材に恵まれている。

公孫氏は唐の皇帝でありたいと願うことはなく、国境の州や草原、砂漠の民を豊かにすることに重きを置く君主だ。長安を脅かすことはまるで考えない。そして何者にも襲撃されることのない強靱、鉄壁な軍力を誇る。

趙王は公孫氏が疎ましく、唐の統一を自分の手で成し遂げるために、数年かけて軍を鍛え、李宰相ら文人を抱え込み、財力を蓄え謀反を企てている。

秦王、趙王それぞれが、政治力、軍力、財力、人心掌握すべてを兼ね備えている公孫氏を味方につけることに躍起になっているが、当の本人はまるでその気がなかった。秦王、趙王のどちらが皇帝になろうとも、公孫氏を脅かすことはできないと知っているからだ。

公孫氏は、長安やその周辺の街、趙王配下の州に間者を放ち、鷹軍と共に城下で秘密裏に羊鍋や妓楼を営む。満遍なく張り巡らされた情報収集力で動向を漏れなく把握する。自国に入り込んだ間者は仕留めず、常に見張る。伝令を素早く鷹が報せる。国境、草原、砂漠の諜報力には、他国の間者などまるで及ばない。

間者からの報せが頻繁に入る。

「趙王は銀閣、居水から崑崙関周辺に兵を集結させる動きあり。」

「長安と崑崙関を頻繁に早馬、伝令が往来。」

「武器、軍馬、兵糧を揃える。」

「李宰相ほか武人に銭荘から軍資金が動く。」

「第四皇子、趙王はいよいよ動き出す。狙いは長安、まさしく謀反の兆しだ。」

「こちら4州はどう動きますか。」

「うーん。条件のいい方に付くかな。どちらに貸しを作るのが得策か。」

「治世を見るに秦王かと。趙王は虚栄心と猜疑心が強く、公孫殿下と調和を保ちながら、草原や砂漠との交易など不可能です。」

「僻みと妬みと恨みで生きてきた奴だから、信用できない。」

「長安からそろそろ使者が来る頃ですね。」

「まだ先になる。誰を寄こすかで決めよう。」

「わたしの予測では魏朗君か、駙馬都尉でしょう。」

「ふーん。將軍府の宿敵だな。公主は耀歌が大切にしている従妹楽涼だ。」

「二人ともに秦王の懐刀です。今更仇とも思いません。長安より国境のいまが充実していますから。叔父上のおかげです。」

「それはそうと、いまは耀歌の記憶が戻ることが何よりだ。」

「随一の軍師ですからね。」

「総帥、趙王に長安への謀反の疑いがあります。兵を集結、軍資金が動き、武器を集めています。李宰相は趙王に付いています。」

「公孫氏の動きは。」

「傍観でしょう。どちらに付くということもないようです。」

「確かに双方とも公孫氏を味方につけたいが、攻めることはできない。李宰相が執拗に耀歌を狙うのは長安への謀反が原因か。」

「耀歌様の恐ろしさがわかっているのです。」

「では、虎軍に向かう。まずは可汗と話し合う必要がある。そして記憶がなくても耀歌との関係をはっきり伝える。長安が不穏となればこれ以上は待てない。」

「虎伸可汗、長安に向けて趙王3州が謀反の動きあり。朔州とも話し合う必要があるので、これから虎軍に向かう。」

鷹軍総帥 阿鷹 筆

「鷹軍総帥がこちらに入る。虎狼が出迎えるように。」

麗月一行は明日獏北を出る。

「英楓様、長くお世話になりました。たくさんの薬草をありがとうございます。またお会いできることを楽しみにしています。」

「刺客が危険だ。送ろう。」

「ありがとうございます。」

麗月一行は英楓と兵に守られ、虎軍への帰途に就く。二刻ほどで阿史那氏虎軍が出迎えた。

「麗月様、虎軍の虎玉が迎えに上がりました。これは英楓首領自ら護衛とは。」

虎玉ほか、馬から降りて英楓首領に拝礼する。

「出迎えご苦労。麗月殿には大変世話になった。このお返しはまたの機会にと可汗にお伝えしてくれ。」

「はい。それではここからはわたしどもが護衛します。」

「麗月殿、またの再会を楽しみにしている。」

「はい。今度はゆっくり獏北に伺います。」

「冬至の頃に祭礼がある。招待しよう。」

「ぜひ。それではここで失礼いたします。」

「道中気を付けて。」

英楓は麗月の馬車が見えなくなるまで見送る。中秋の名月は麗月殿と観賞したい。

明日虎軍に到着というときに、またもや刺客の急襲にあうが、20騎程度はあっという間に掃討される。阿史那氏虎軍精鋭は圧倒的に強い。中原の刺客では敵うはずもない。

「麗月様、刺客は片づけました。お休みください。いよいよ明日は軍営です。虎伸様がお待ちですよ。」

「西華、ここ数日は日に三度、薬草を煎じて飲んでいるけど、何も思い出せない。」

「そんないきなり効果はありません。長い目で焦らずです。」

鷹軍に龍凰が舞い降りる。

「総帥、獬北を出ます。首領自らの護衛、途中で虎軍の護衛へつなぎました。刺客も一掃し耀歌様は無事です。ご安心を 阿藤 筆」

翌日、阿鷹は虎狼の出迎えて虎軍に入る。

「出迎え感謝します。至急の報せがある。趙王に謀反の動きあり。標的は長安、皇宮。このあと朔州の公孫氏に会うつもりです。」

「公孫氏は秦王、趙王どちらに付くのか。」

「まだ決めていないようだ。李宰相の執拗な刺客のこともあるので、これを機に潰す。鷹軍だけで十分だ。」

「阿鷹に刺客をか。」

「建王と共に殉死した齊北王、楚大將軍の王女が長安を追われ、何度も刺客に襲われながら鷹軍に逗留することに。長安での蹴鞠試合でわたしが見染めた女子だ。鷹軍は王女によって自給自足が叶い、妓楼や羊鍋で利益を得るようになったのだ。そのうえ稀代の軍師であり、公孫氏は全幅の信頼をおいている。

軍営から泉州に向かった際に刺客に急襲され、岸壁から墜ちた。そして流され、川下で宿営中の虎軍に助けられた。いまは麗月として虎軍にいる女子は齊北王の息女耀歌殿だ。西華は將軍府の頃からの護衛だ。」

「え、麗月が長安の皇族だって。あの気品と美しさはそうだったのか。」

「わたしが生涯共に生き、守ると約束した女子だ。記憶がなくても一生傍にいる覚悟だ。どうかわたしの手元に返して欲しい。」

「いきなり環境を変えることは病状を悪化させると軍医に聞いている。西華を傍において様子を見ながらというのはいかがでしょうか。」

「可汗との仲睦まじい話は聞いている。もう、わたしを忘れて可汗と生きるというのならすっぱりと身を引くつもりだ。」

「そろそろ戻る頃だ。鷹が上空を舞っている。出迎えてみるといい。」

「驚かせて混乱したら逆効果だ。あとでゲルに行く。」

麗月が阿鷹の許嫁とは。記憶が戻らなければここにいる。もし戻ればわたしから離れるだろう。恋の成就と

はいつも先に出会った者が優位だ。どうかこのままでいて欲しい。

耀歌の記憶が戻るまでは、虎伸の傍にいるのか。もうわたしとの約束は永久に忘れてしまうのか。記憶が戻っても虎伸との記憶は消えない。不安だ。ここでは麗月と虎伸の仲睦まじい話題ばかりを耳にする。

麗月一行が虎軍に入る。虎伸自ら出迎えた。

「虎伸様、ただいま戻りました。」

麗月は馬車を降りて虎伸に駆け寄る。

「無事で何より。もう文だけ残しての遠出はやめて欲しい。」

そうやって麗月を抱きしめた。

「虎伸様、皆が見ています。恥ずかしい。」

麗月の顔は赤く染まり、虎伸に肩を抱かれ恥ずかしそうに俯きながら歩く。

いつものことながら耀歌は美しい。虎伸とは似合いだ。

2人のその姿を遠目で阿鷹は見守る。固く拳を握りながら……。

夜、阿鷹は耀歌のゲルに向かう。西華が出てきたので声をかける。

「総帥、やっと会えました。耀歌様は疲れが出たのかももうお休みです。」

「様子はどうか。」

「毎日三度、薬草を煎じて飲んでいきます。まだ記憶は戻りません。」

「そうか。明日朔州に入る。趙王に謀反の動きがあるのだ。」

「謀反より、李宰相を仕留めたい。あれだけ刺客を送り込む陰湿さはもうたくさんです。」

「この機にあいつを抹殺するつもりだ。混乱している中、鷹軍だけで十分だろう。」

「明日夜明けとともに耀歌様は春月と馬駆けに行きます。ぜひ総帥も。」

「わかった。」

夜が明ける少し前に耀歌と馬を駆る。

「草原が黄金色に輝く日の出は素晴らしい。砂漠と並ぶ美しさです。」

「朝駆けは格別だな。」

「なぜかこの軍営とちがう草原で、虎伸様以外の人と馬掛けをした記憶があります。確か阿鷹様と呼んでいたような。」

「阿鷹はわたしだ。」

「あなたさまが。」

「阿史那氏鷹軍総帥阿鷹だ。」

朝日が昇り始める。二人は馬を降りて地平線を望む。並んで座ると薄荷の香りが鼻腔を抜ける。懐かしく胸がときめく薄荷の香りだ。

阿鷹の横顔を眺めながら、以前その胸に抱きしめられたことが甦る。

「阿鷹様、もしかしてわたしをご存知でしょうか。」

「ああ、以前から知っている。」

「もしかしてわたしは鷹軍の軍営にいたのですか。」

「そうだ。中原から刺客に追われ、鷹軍で暮らしていた耀歌殿だ。わたしとは思い合う仲だ。」

「なぜここに。」

「泉州で刺客に追われ、虎軍に助けられたのだ。その時記憶を失くしたらしい。わたしのことはまるで覚えがないのか。」

「たびたびお名前を思い出します。阿鷹様とは思い合う仲だったんですね。」

「少しずつでも記憶が戻ることを願う。もう離れているのは辛い。わたしの元へ帰ってきて欲しい。」

「阿鷹様との再会を機に、徐々に記憶が鮮明になってくる気がします。お待ちいただけますか。」

「無理はしなくていいが、少しでもわたしを想うのなら共に鷹軍へ帰ろう。今日朔州に入る。耀歌殿の叔父上、公孫氏に会うのだ。」

「阿鷹様、お願いがあります。新しい記憶が積み重なる前に、いまここでわたしを抱きしめてくれますか。阿鷹様との記憶を甦らせたいのです。」

阿鷹は耀歌を引き寄せ、力強く抱きしめた。

耀歌は深く広い胸に顔をうずめて、薄荷の香りに包まれる。

あー胸が高鳴る。そして懐かしく愛おしい。ずっと抱かれていたい。

少し離れて西華と阿藤が見守る。

「天命の二人だ。」

「総帥と耀歌様は天意によって結ばれている。離れることはない。」

「虎伸様や英楓首領でもあの2人の仲は引き裂けない。耀歌様は武神を虜にするほど魅力的だ。」

「麗月はどこだ。」

「阿鷹総帥と馬駆けに。西華殿と阿藤も一緒です。」

先方に馬を引く阿鷹と麗月が見えた。

「虎伸様、ただいま戻りました。」

「今朝は阿鷹殿と馬駆けか。」

「はい。」

「阿鷹殿はすぐに朔州に向かうのだな。」

「はい。それでは麗月殿。」

「お気をつけて。」

「西華、薄荷を採りに行こう。あの香りが記憶を戻すきっかけになるかもしれない。部屋中を薄荷の香りで埋め尽くしたい。」

「はい。そうしましょう。」

## 国境の強国と最強の軍師

国境4州を統治する公孫氏こと涼王は、より長安に近い3州を統治する趙王との関係が良好ではない。趙王が秦王に謀反を企て政権を奪うとなれば、涼王には益がまるでない。むしろ交戦することになり唐は荒れる。そして大国唐は草原や砂漠、山の国から一斉に攻撃され、民を苦しめる戦乱の世になる。真つ向勝負であれば秦王に軍配が上がるが、趙王はずる賢く、用意周到、軍資金が豊富だ。水面下で様々な悪策を練るだろう。これを予測するには耀歌の頭脳が欠かせない。趙王は、長安はもちろん随所に間者を忍び込ませ、渡鴉で自在に情報を集積する。長安の皇宮は丸裸にされているだろう。間者を炙り出すには精鋭部隊を送り込む。それには秦王と連携をとるしかないか。

秦王は中庭で娘婿、駙馬都威と囲碁を楽しんでいた。上空に鷹が舞う。

「陛下、皇宮に鷹とは、もしや・・・。」

「涼王の佐鷹だ。首元の白い羽でわかる。」

秦王が見上げると鷹は舞い降りた。足環をはずす。

「趙王が軍力増強。国境4州より最強軍を長安へ。長安を必ず死守せよ。反乱軍を制圧したのちに銀閣、崑崙関、居水は我が領地に。魏朗君、駙馬都威と連携。 公孫 筆」

「さすがに涼王は抜け目ない。いま趙王の軍とぶつかれば唐は傾国の一途だ。国境4州の力を借りてでも制圧したい。涼王は戦神、攻め込まれたらわたしでも敵わない。長年かけた趙王の軍力に対抗するには涼王と手を携えるしかない。」

「陛下、英明です。魏朗君ともに反乱軍制圧のために戦います。涼王の兵は精鋭、最強の軍師が揃っています。」

「たしかに第四、第五皇子にその配下、將軍府の朗君と最強だ。涼王が戦を好まず、玉座に固執しないからわたしはここにいる。」

「涼王は都より辺境が性にあっていると公言しています。」

「自由と民を愛する風流人だからな、涼王は。父上とは真逆、ぶつかるばかりだった。」

「わたしが朔州に参ります。」

「涼王、駙馬都威が朔州に入る。趙王の軍とは互角、長安を包囲されたら苦戦する。国境4州が後方から攻め上がれば勝機がある。趙王に長安を渡せば戦の世になる。」

秦王 筆 」

「陛下、鷹が文を運んできたようです。」

「早いな。長安の兵は国境の兵と比べて脆い。長安に軍を潜入させよ。隊商を装い拠点を作れ。戦術に秀でる將軍を抜擢するように。そして耀歌に迎えを。香姜と西華も召集しろ。」

「はい。」

長安の蹴鞠試合で阿史那氏と交戦し、鷹軍総帥阿鷹と出会う。

狩場に將軍府の兵が早馬で、二叔父の謀反と皇宮の惨劇を報せる。

従兄は朔州に、耀歌は香姜と西華と泉州に二手に分かれる。

竹林の館で手負いの鷹の世話をする。

阿鷹に再会。刺客に襲われ鷹軍へ。

旧可汗、狼軍との戦。

そして深く広い胸に抱かれた日……。

耀歌は目を覚ました。薄荷の香りが記憶を呼び起こしたのか。紫草のおかげなのか。夢か記憶か……。鮮明だった。

「西華、ここは虎軍営なのか。」

「はい。」

「阿鷹殿は。」

「朔州に向かいました。」

「叔父上に会いにか。」

「はい。どうやら記憶が甦ったようですね。」

「断片的な欠片がつながったようだ。頭痛もない。」

「それは何よりです。やはり愛し合う阿鷹様が記憶を甦らせたのですね。」

「虎伸様には相当お世話になったのだな。阿鷹殿はなぜ朔州に。」

「下元節の頃、趙王が長安に向けて挙兵するらしいと。」

「もう少しあとだな。時期が悪い。雨季は川が氾濫しやすく野営が難しい。」

「香姜です。」

「香姜、耀歌様が戻ってきた。」

「おわかりですか。うれしいです。さっそくですが、公孫殿下より招集です。」

「阿藤殿の鷹に文を。朔州に向かう。虎伸様に会わなければ。」

「虎伸様、麗月です。」

「入ってくれ。どうしたのだ。」

「虎伸様、耀歌の記憶が戻りました。麗月と虎伸様のいままではそのままに。本当に感謝できません。命の恩人です。」

「鷹軍のことや阿鷹総帥とのこと、思い出したか。」

「はい。長安での蹴鞠試合から鷹軍での生活すべてを……。」

「わたしとのことは消えないのだな。」

「はい。素晴らしい思い出になります。」

「わかった。」

「これから朔州に入ります。涼王からの招集です。趙王の件かと……。」

「雨季が終われば唐が荒れるかもしれない。」

「どうにか抑え込みたいです。近々長安に入るかもしれません。」

「稀代の軍師耀歌殿が戻ったのだな。くれぐれも無理はしないで欲しい。わたしが助けた命だ。約束してくれ。」

「はい。」

虎伸は耀歌の手を引き、思いきり抱き締めた。白檀の香りに包まれながら、耀歌は虎伸の背中に腕を回した。

「叔父上、記憶が鮮明に戻りました。さっそく朔州に香姜、西華とともに向かいます。」

阿鷹総帥より少し遅れて入ります。

耀歌 筆 」

「陛下、阿史那軍総帥阿鷹殿がみえました。」

「通せ。」

「涼王、阿鷹です。趙王の件を相談させてください。」

「阿鷹殿か、耀歌の記憶が戻ったと報せが入り、いまこちらに向かっている。」

「記憶が戻ったんですか。」

「そうだ、耀歌が戻ってきたのだ。」

「長く苦しい日々でした。実は夫婦になる約束を交わしていたのです。草原の男は見染めた女子を一生愛し守ります。父親代わりでもある涼王の許しを得たいと思っています。どうか耀歌殿をわたしの妻にください。」

「想い合うふたりが決めたことだ、祝福する。しかしいまだ許嫁と信じている玉齊がどうするか。この話は耀歌も交えて話そう。」

「殿下、耀歌様が到着しました。」

「すぐにこちらへ。阿鷹総帥は。」

阿鷹は耀歌の到着の報せを受け、すでに城門前で待っていた。

鳳凰が上空を羽ばたく。耀歌の馬車だ。西華と香姜が先導し、後方に阿藤が続く。

「耀歌様、阿鷹様の出迎えです。」

阿鷹は冬雪に跨り、馬車の前へ。

耀歌は馬車を降りる。

阿鷹が手を伸ばし耀歌を引き上げ馬上へ、

そのまま城内に向かった。耀歌はしっかり阿鷹の胴に腕を回し背中に頬を寄せた。薄荷の香りが広がる。阿鷹は耀歌の温もりを全身で感じた。

馬を降りて阿鷹は耀歌の手を引き城内へ。侍従や侍女が仲睦まじい2人に向けて、俯きながら微笑む。

「耀歌、記憶が戻ったか。」

「はい。虎伸様に命を救われ、何から何までお世話になりました。先日阿鷹殿に再会して記憶が甦りました。英楓首領にいただいた紫草が効いたのかもしれませんが。」

「噂によると可汗や首領を虜にしたとか。阿鷹殿は気が気でなかったらしいぞ。」

「単なる噂です。わたしの想い人は阿鷹様だけですから。」

「阿鷹殿から婚姻の申し入れがあった。趙王の件が済み次第、改めて検討するでよいか。」

「はい、叔父上。」

「わたしも同じです。謀反の件について朔州の戦略をお聞かせください。」

「国境4州全軍で趙王率いる軍から長安を守る。趙王の圧政は望まないし、もう戦はしたくないが秦王の軍だけでは難しい。耀歌、何か策はあるか。」

「秦王の軍は長安の守りに徹するのが良策。そしてこちらは隊商に成りすまして長安周辺と城下に拠点を作り、城内に敵を入れずに西から趙王の配下の将軍が4万程の軍で長安に攻め込むのを迎撃。

魏朗君と駙馬都威率いる3万の軍で長安を死守する。長安近郊で敵を迎え撃つのは、わたしと白総将軍の3万。」

「耀歌、3万での城外戦は少ないのでは。」

「趙王の3州が出陣で手薄になったら、後方から五兄4万、東から四兄4万で奪取して長安へ向かう。出陣後の3州に奇襲をかければ1日で墜ちるでしょう。四兄は疾風のごとく攻め墜とし、わたしと合流してください。それまでは持ち堪えます。」

「奇襲とは。」

「3州それぞれの関門内に伏兵を潜入させて奇襲に備える。隊商に紛れるのが良策でしょう。夜明けとともに攻撃。4州は勇猛果敢な将軍と兵が揃っています。人選は叔父上と兄上で決めてください。わたしは白総将軍をお願いします。香姜、西華ともに長安城外に出陣します。」

「わたしは鷹軍精鋭を率いて李宰相を討つ。長安城下に潜入し時機を見て討ち取るので任せて欲しい。」

「では、宰相周辺は阿鷹殿に一任します。長安では阿鷹殿、魏朗君、駙馬、そしてわたしと呼応し、敵を即決即攻で掃討しましょう。但し、秦王から三顧の礼により帯同することをすべての軍に認めさせます。ここをお忘れなく。」

「当然だ。趙王の領地がすべて手に入ることで、国境、草原、砂漠に干渉しないことを確約させる。明日各将軍を集め軍議とする。今日はゆっくり休んでくれ。」

「総帥、耀歌。婚儀の話はこの戦が終わってからとしよう。各自、部屋と夕餉は用意させてある。」

「はい。ありがとうございます。」

月が美しい。耀歌が屋根上で月を眺めていると、阿鷹が隣に座った。

「何もかも思い出したのか。」

「はい。阿鷹様との出会いからすべてです。」

「虎伸とのことは。」

「もちろん覚えています。いい思い出になりますと虎伸様に伝えました。」

「よかった。もうどんなことがあっても離さない。」

「離れません。何があっても・・・。」

阿鷹は耀歌の肩を引き寄せ唇を重ねた。

耀歌はそっと瞼を閉じた。

翌朝、阿鷹は軍営に。耀歌は朔州で涼王に献策。次に会うのは戦場だ。

「耀歌、必ず無事でいてくれ。香姜、西華、耀歌を頼んだぞ。」

「はい。命に代えても。」

「阿鷹殿もお気をつけて。」

雨季が明ける。

隊商に扮装し、耀歌と白総率いる兵が何隊にも分かれて長安に向かう。先発隊により中心部はいくつもの露店を営み、敵状視察と情報発信に努める。

すでに城内に潜入している敵兵は500人程、侍従や守衛、庭師として潜伏している。

白総の配下もより皇宮近くに潜入している。

空き家を借り切り、城外の村に潜伏。敵の攻撃に備える。

「白総將軍、精銳で敵の宿營地に奇襲をかけましょう。まだ緊張感が薄く少数のうちに仕留めたい。」

「物売りとして村に入り込み、薬を使うのもいいでしょう。夜襲をかければ朝には壊滅。」

3か所の宿營や村を同時刻に襲います。翌朝に進軍する別軍を長安で迎撃しましょう。

第四皇子の先鋒がすぐに合流します。疾法を得意とする將軍と駿馬が揃っていますから。」

「鷹軍の先陣は宰相や高官の屋敷近辺にすでに潜入している。草原の民は街の賑わいに溶け込むのが上手い。そして魏朗君と駙馬都威の兵に合流している。うまく呼応できよう。」

「最強の軍師と草原の戦神、そして4州が手を組み、遺恨のある長安を守るとは歳月の経過を感じます。」

「趙王に追隨する2州の軍は、こちらと四兄の軍で先制攻撃。泉州の五兄は、銀閣、崑崙、居水を制圧し、即長安に入る。」

城門前で前後方挟み撃ち。城内、その近郊は秦軍と鷹軍の鉄壁の守りで防御します。

趙王は長安の将が必ず討ち取るように。」

「はい。朗君の仰せの通りに。」

## 瀕死の朗君

趙王の軍が長安に向けて崑崙関から動き出した。長安までいくつもの拠点に伏兵を配置。進軍するごとに大軍になっていく。西からは趙王の皇子、拓衛、勘衛率いる精鋭4万の兵が集結。趙王は10万超の大軍で攻め上がる。

東から第四皇子の4万、反乱軍の背後から第五皇子の4万。耀歌率いる3万はすでに長安周辺で迎え撃つ軍制をひく。

城内には秦軍2万、阿史那氏鷹軍1万に対して、李宰相らの敵軍3万が取り囲む。兵馬の数は互角だ。拠点とした村は耀歌の策で壊滅。反乱軍は2万の兵が消失し、耀歌率いる軍の策略に苦戦を強いられる。

「この戦は情報を先取した方が有利だ。渡鴉か鷹か……。それぞれ忍ばせた間者からの情報戦線が勝負を分ける。」

「朗君、皇宮内から李宰相軍が引き上げ西に逃亡中です。」

「拓衛皇子の軍を撃破。」

「勘衛皇子が西へ引きます。」

「城内、秦軍、鷹軍が勝利。敵を制圧しました。」

「わかった。李宰相と勘衛軍が合流すると面倒だ。すぐに宰相の軍を追う。西華、香姜は後を頼む。」  
耀歌は夏陽と西へ向かう。50騎程が急ぎ追隨する。

「阿鷹殿、李宰相は西へ逃げた。」

「すぐに追う。」

阿鷹は兵を率いて西へ向かう。途中、白総軍に遭遇する。

「白総將軍、耀歌殿は。」

「李宰相が西へ逃げたので追っています。同じく趙王の皇子二人も西へ引きました。朗君が危険です。すぐに追いましょう。」

「もう長安は安泰だ。攻め上がる趙王の軍は四、五兄で制圧。あとは西の2万だ。集結して大軍で取り囲む。」

逃げ込む西は趙王領だ。3千人の民が住む。そこへ2万の反乱軍が逃げ込み、村人を人質にする。

「兄上、この村で籠城か。」

「ここで耀歌を捕らえる。村を民ともに焼き払うと言えば投降するだろう。」

「耀歌を捕虜にするのか。」

「連れて逃げれば追ってこないだろう。」

「殺しますか。」

「いや、あれほどの女子は殺さず、そばに置くのだ。」

「危険すぎる。」

「反抗するなら殺せばいい。ともかく閉じ込めておけ。」

「朗君、あの村は趙王領です。あそこに二人の皇子、深手を負った李宰相が逃げ込みました。援軍が来るまで待機しましょう。」

「日も落ちた。様子を見よう。」

突然村に火が灯され、周囲が明るくなる。

「將軍府の朗君はいるか。村民もろとも村を焼き払うか、朗君が人質となるか。」

「その声は。」

「忘れたか、拓衛だ。」

「趙王の皇子だな。勘衛殿、李宰相もここにいるとは。すぐそこは阿史那氏の領地だ。逃げられないのでは……。わたしが行けば村民は助けるのだな。」

「まずは半数だ。いま来なければすぐに焼き払うがどうするかな。」

「わかった。村民を解放してからだ。わたしはここから逃げも隠れもしない。何かあれば得意の矢を放つがいい。たしか拓衛殿は弓矢の名手だったはず。」

「わかった。」

村民が次々に村を出る。耀歌軍の指示で後方に保護する。

「これで半数だ。」

「これほどの人質を解放するのにわたしだけでいいのか。」

「朗君だけで十分の価値がある。」

「随分と認められたものだ。」

耀歌はゆっくりと馬で村にはいる。兵に囲まれ酒樓に閉じ込められた。まだ半数の村民が残る。

「耀歌は最高の武人だ。見張りは多く、武器を持て。絶対に逃がすな。」

耀歌は空を見上げる。

美しい月だ。そろそろ下元節だな。阿鷹殿は無事か。いつから2人は生死をさまよう運命なのか。何かを掛け違えてしまったのだろうか……。生きて帰れたら、阿鷹殿と平穏な暮らしがしたい。

「総帥、朗君の兵です。西のはずれの村から村民が逃げてきます。代わりに朗君が敵の捕虜に。兵は村の周囲に待機しています。」

「捕虜にか。村にいるのだな。」

「総帥、間者からの報せで、朗君は酒樓に監禁されています。」

「第四皇子、急報です。朗君が西のはずれの村に監禁されました。鷹軍と白総將軍の軍が取り囲んでいます。」

「すぐに向かう。五弟は城内近辺から敵を逃すな。」

「白総殿、わたしは鷹軍を連れて村の後方から急襲し、耀歌を助け出す。四兄と合流して正面から攻めてくれ。合図は花火だ。」

下元節の大きな花火が放たれた。

「拓衛殿下、正面から朔州が攻めてきます。草原から逃げましょう。」

「勘衛殿下、後方の草原から阿史那氏鷹軍が進軍しました。」

挟まれたらもう逃げ場がない。耀歌を道連れに死ぬ。拓衛は酒樓に入る。

「耀歌を道連れに悔いはない。幼い頃より耀歌が好きだったのに何でこんなことに。共に死のう。」

拓衛は鎖でつながれている耀歌の胸を刺した。そして酒樓に火をつける。一気に燃え上がり炎に包まれた。

そこへ酒樓の扉を蹴破り、床に伏せる耀歌を抱き上げ脱出。阿鷹だ。

意識の失せた耀歌を夏陽に乗せ草原へ向かう。酒樓は炎とともに崩れ落ちた。

川の畔に寝かせ応急手当をするが意識は戻らない。急ぎ冬雪で皇宮へ。

「耀歌、持ち堪えろ。必ず助かる。」

阿鷹は耀歌を抱きながら、魏朗君の後を追う。

「侍医を呼べ。耀歌を助けるのだ。胸には刺し傷、煙に巻かれ意識が戻らない。」

「魏朗君、傷は深く、煙を吸って喉はただれ、薬湯が呑み込めません。意識が戻るかどうか。」

このまま朝を迎えられるか不明です・・・。」

「それは耀歌が死ぬということか。」

「医者として手は尽くしました。」

「下がれ。」

「あとはわたしが看病します。」

「阿鷹殿、頼んだぞ。」

「耀歌、お願いだから目を覚まして欲しい。やっと記憶が戻ったのに、はっきり気持ちを伝えていない。わたしが心から愛し、一生守り抜くと誓ったのだ。わたしを一人にしないでくれ。」

「総帥、薬湯です。」

「わたしがやる。下がってくれ。」

阿鷹は耀歌を抱き起し、自分の口に薬湯を含み、口移しで飲ませる。耀歌の喉が上下して薬湯が身体に入る。

刺し傷に薬を塗って包帯を交換し、火傷の粉薬を患部にかける。

耀歌は三日三晩眠り続けている。

皇宮は平穏を取り戻した。趙王、勘衛皇子は捕縛され、執拗に耀歌を狙った李宰相は鷹軍によって殺され、拓衛皇子は焼死した。反乱軍はほぼ壊滅。趙王の領地は涼王の支配となった。

崑崙関、居水は第四皇子。泉州とともに銀閣は第五皇子が治める。

秦王は改めて国境4州の統率力に感嘆した。涼王が明君と讃えられるのを目の当たりにしたのだ。

耀歌のために各国の王が尽力するのにはさらに驚く。皆揃って耀歌への恩返しと言う。そして稀代の戦神と恐れられる草原の覇者鷹軍総帥と、相思相愛と聞いた。さすが朗君六耀だ。

敵対するはずの砂漠や草原の支配者と交易し、国を豊かにする手腕は唐の国力につながる。これからは国境を敵視することなくうまくやっていく覚悟だ。

皇宮の離宮に、まだ意識の戻らない耀歌を見る阿鷹と、香姜と西華。数名の護衛を残して鷹軍は軍営に戻った。

「阿鷹殿、漠北の英楓首領から、意識を回復する秘薬と、火傷に効く薬草が早馬で届きました。砂漠にしか育たない珍しい薬草です。ぜひ試してみしましょう。」

「ありがたい。」

「喉を通りますか。」

「まだ口移しでないと薬湯が飲めない。」

「常温にします。包帯も新しく替えます。」

七日目、耀歌は目覚めた。

耀歌の傍らで伏せて眠る阿鷹の頬にそっと触れる。

「耀歌、目が覚めたか。」

「阿鷹殿、ここは。」

「長安の離宮だ。英楓首領から送られた薬が効いたようだ。可汗からは暖かい布団と衣が届いた。皆に愛されているのだな、耀歌は。」

「ずっとわたしを守ってくれるのですね。夢の中で聞こえました。」

「そうだ。やっと夫婦になれる。」

「わたしたちの間に堅苦しい段取りは必要ない。阿鷹がいれば十分幸せ。」

「俺もだ。耀歌さえいれば十分だ。草原に帰ろう。」

阿鷹は耀歌の頬に口づけをした。

## ふたりの旅路

しばらくして耀歌は回復し、庭を散策できるまでになった。

阿鷹との仲は宮中で羨望の的となり、第五皇子もやっと諦めがついたようだ。

「阿鷹総帥、耀歌とは長安の蹴鞠試合からの縁だと聞いた。そして追われる耀歌をずっと鷹軍で守ってくれたとも。」

「そうだ。宰相の刺客はしつこく、泉州を追われ、鷹軍に入った。それから襲撃で記憶を失い可汗の元で暮らした。耀歌は、六耀の頃から草原とは縁が深い。」

「いつから想い人に。」

「泉州から鷹軍に入ったとき、ケガの手当てをして女子とわかってから。五兄の許嫁と聞いて嫉妬したし、気がでなかったこともある。」

「そうか。どうか耀歌を幸せにして欲しい。中原で暮らすつもりがないという。いまは草原の勇者を伴侶に持つ身だからと。」

「香姜は鷹軍の阿楊殿と生きるのか。」

「耀歌様はお気づきでしたか。はい。このまま軍営で暮らしたいと思います。求婚されました。」

「それは素晴らしい。ぜひそうして欲しい。阿楊殿となら幸せになれる。草原の男は愛した女子を一生大切に守るそうだから。」

「はい。」

「西華は」

「実は・・・。」

「白総殿だな。将軍府にいた頃からお互い気になっていたようだ。やっと求婚されたか。」

「先日の長安の戦で、お互い生き延びたら一緒になろうと言われましたので。」

「では朔州で暮らすのだな。」

「はい。妓楼と羊鍋の商いを広げるつもりです。」

「3人で生死を共にし、幼いころからずっと一緒に暮らしてきた。ここからはそれぞれの伴侶と歩むのだな。」

「わたしは鷹軍で耀歌様のお世話をします。自分のことよりも、耀歌様が総帥と共に生きることが何よりもうれしいのです。長く険しい道のりでしたから。」

「流浪の民からやっと落ち着く場所が草原というのがうれしい。」

「阿藤、総帥と耀歌殿のゲルをすぐに。そして下元節に婚礼を。準備にかかって欲しい。」

「総帥から軍師と香姜殿のゲルと、婚礼の準備を、下元節に執り行うよう指示されていますよ。」

「ともかく阿鷹が先だ。わかったな。」

「叔父上、お世話になりました。明日にここを立ちます。おかげさまで十分に療養することができました。」

「今回は唐の為に尽力してくれて感謝しきれないほどだ。婚礼は草原でと聞いた。そちらの慣例に従い婚礼衣装や結納品を用意した。下元節に届けるので受け取って欲しい。」

「ありがとうございます。」

「阿鷹殿は草原の勇者として敬われる素晴らしい伴侶だ。どうか大切な耀歌を幸せにして欲しい。」

「一生大切にすると天狼神に誓います。」

しばらくして、阿鷹と耀歌、香姜と西華他護衛は草原へと帰った。

## 耀歌と阿鷹

「香姜と西華へ

結納品は公平に分けるように。阿鷹としばらく旅に出ます。漠北に命の御礼を届けに行きながら各国を旅します。何かあれば必ず報せる。

愛する人と幸せに。 耀歌 筆」

「阿楊、鷹軍をしばらく頼む。耀歌と旅に出る。香姜殿を大切に。何かあれば鳳凰で報せる。 阿鷹 筆」

草原と砂漠の国境近くに、阿藤他総帥の従者が管理する屋敷がある。

広大な敷地に羊は馬が放牧され屈強な番犬が狼の侵入を防ぐ。

水路が整備されまるで軍営だ。

侍女も数名、従者共に暮らしている。

ここは阿鷹と耀歌の新居だ。

「平和が訪れたら耀歌と暮らすために屋敷を用意した。」

「素敵ね、夢のよう・・・。」

「さすがに王女様に家事はさせられないので、屋敷の管理や雑事に最小の従者を阿楊が用意してくれた。」

「軍師は策士ね。香姜と離れたくないからよ、きっと。」

「ささやかな婚礼をあげよう。準備はできている。屋敷の調度品はすべて涼王が婚礼のために調べてくれたものだ。」

その夜、数名の従者と共に厳かな婚礼が行われた。

美しい深紅の衣装を纏う威風堂々の新郎と気品溢れる新婦は、拝礼を終え参列者に送られながら寝所へ。

阿鷹が耀歌を抱き上げ寝台へ・・・耀歌は阿鷹の首に手を回す。

阿鷹の体温を感じながら重なり合う・・・。

これまでの命を懸けた日々が走馬灯のように甦る。

これからは愛する人や家族とともに、戦のない穏やかな日々を送ることを願う。

夜空を照らす美しい月と無数の星が輝く草原、やがて黄金色に大地を染める朝を迎える。

## 読者が選ぶ、押しフレーズ

読者イチ推しの時代を超えた名場面、愛の台詞をセレクトしました。

---

たった一人の戦術に負けた。敵の強みを認め、己の弱点を見極め最良の戦術を立てる。  
その冷静さと最大限の力を引き出す知力は敵ながら称賛に値する。一体何者だ。

阿史那軍で最強と恐れられる鷹軍の総帥らしい。冷静沈着で敵の動きを瞬時に掴んで策を講じる。戦であれば到底敵わない。唐軍は阿史那軍に攻め込まれたら負けるだろう。

「ああ、知性、感性、品性、容姿に恵まれ度胸もある。武術や馬術にも秀でていて唯一無二の存在だ。友になれて最高だ。」

自分は度胸も勇気もあると信じていた。でも阿鷹を好きであればあるほど、失うことを恐れて何も言えない。  
耀歌は結局声もかけずに自分の幕舎に戻っていった。

「阿鷹様、お願いがあります。新しい記憶が積み重なる前に、いまここでわたしを抱きしめてくれますか。阿鷹様との記憶を甦らせたいのです。」

阿鷹は耀歌を引き寄せ、力強く抱きしめた。

耀歌は深く広い胸に顔をうずめて、薄荷の香りに包まれる。

あー胸が高鳴る。そして懐かしく愛おしい。ずっと抱かれていたい。

耀歌は空を見上げる。

美しい月だ。そろそろ下元節だな。阿鷹殿は無事か。いつから2人は生死をさまよう運命なのか。何かを掛け違えてしまったのだろうか……。生きて帰れたら、阿鷹殿と平穏な暮らしがしたい。